北西部土地区画整理事業地区内二級河川安原川広域河川改修事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

二日市イシバチ遺跡2

2012

石川県野々市市教育委員会

北西部土地区画整理事業地区内二級河川安原川広域河川改修事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

二日市（ふつかいち）イシバチ遺跡2

2012

石川県野々市市教育委員会

調査区全景（上空から）

調査区遠景（西から）

SI 1、SI 2（南東から）

SI 2 改修前完掘（東から）

例　言

1　本書は、二日市イシバチ遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　遺跡の所在地は、石川県野々市市二日市町地内である。

3　調査原因は、野々市市北西部土地区画整理事業地区内二級河川安原川広域河川改修事業にともなうものである。

4　調査は、石川県教育委員会からの依頼を受けて野々市市教育委員会が実施した。

5　調査にかかる費用は、石川県安原・高橋川工事事務所が負担した。

6　現地調査は平成22年度に実施した。期間・面積・担当者は以下のとおりである。
　期　間　　平成22年８月３日～平成22年10月27日
　面　積　　510㎡
　担当者　　田村昌宏　野々市市教育委員会文化振興課　専門員

7　出土品整理は平成23年度に野々市市教育委員会が実施した。

8　報告書の刊行は平成23年度に野々市市教育委員会文化振興課が実施した。担当及び執筆・編集は田村昌宏が行った。

9　現地調査から出土品整理、報告書刊行に至るまでに、林大智、安中哲徳の協力を得た。（敬称略）

10　本書についての凡例は以下のとおりである。
　(1)　方位は座標北を指し、座標は国土交通省告示の平面直角座標第Ⅶ系に準拠している。
　(2)　水平基準は海抜高であり、T.P.（東京湾平均海面標高）による。
　(3)　出土遺物番号は、本文・観察表・挿図・写真に対応する。
　(4)　挿図の縮尺は図に示すとおりである。また、写真図版における遺物の縮尺は統一していない。
　(5)　土層図の注記は、農林水産省農林水産技術会事務局・財団法人　日本色彩研究所監修『新版標準土色帖』に拠った。
　(6)　遺構名称の略号は以下のとおりである。
　　竪穴建物：SI　　掘立柱建物：SB　　柵列：SA　　土坑：SK　　溝：SD　　穴：P

11　調査に関する記録と出土遺物は、野々市市教育委員会が一括して保管・管理している。

目　次

第１章　調査の経過
第１節　調査に至る経緯……1
第２節　発掘作業の経過……1
第３節　整理作業の経過……3

第２章　遺跡の位置と環境
第１節　地理的環境……4
第２節　歴史的環境……4

第３章　調査の方法と成果
第１節　調査の方法……8
第２節　層　序……8
第３節　遺　構……10
第４節　遺　物……26

第４章　総　括……33
写真図版……43

挿図目次

第１図　調査区位置図……2
第２図　野々市市位置図……4
第３図　遺跡の位置と周辺の遺跡……6
第４図　基本土層図……8
第５図　調査区グリッド設定図……9
第６図　SI１遺構図・上層断面図……11
第７図　SI１遺物出土状況図……12
第８図　SI１貼床下面遺構図……13
第９図　SI２（改修前）遺構図・土層断面図……14
第10図　SI２（改修後）遺構図・土層断面図……15
第11図　SI２（改修前）貼床下面、SB１遺構図……17
第12図　SB２遺構図・断面図……18
第13図　SB３、SA１遺構図・断面図……19
第14図　SK遺構図・土層断面図……20
第15図　SD、P遺構図・土層断面図……22
第16図　土器溜り出土位置図……23
第17図　土器溜り１遺物出土状況図……24
第18図　土器溜り２・３遺物出土状況図……25
第19図　土器実測図１……27
第20図　土器実測図２……28
第21図　土器実測図３……29
第22図　土器・陶器実測図……30
第23図　石製品実測図……31
第24図　石製品、鉄製品実測図……32
第25図　遺構全体図……41
第26図　周辺遺構全体図……42

表目次

第１表　周辺の遺跡一覧表……7
第２表　土器・陶器観察表……35
第３表　石製品観察表……39
第４表　鉄製品観察表……40

第１章　調査の経過

第１節　調査に至る経緯

二日市イシバチ遺跡発掘調査業務は、野々市市北西部土地区画整理地区内における二級河川安原川広域河川改修に伴う事業を調査原因とする。

平成21年11月、石川県安原川・高橋川工事事務所（以下、県安高事務所と呼称する。）と野々市町役場（当時）都市計画課（以下、町都計課と呼称する。）との間で北西部土地区画整理地区内の安原川・Ｃ－１号路線・歯梁工事の計画についての打ち合わせがあった。その際、工事箇所範囲全域が埋蔵文化財包蔵地であることがわかり、工事前に埋蔵文化財の保護措置が必要となった。県安高事務所は石川県教育委員会（以下、県教委と呼称する。）と直ちに協議し、工事の内容から、県教委は発掘調査による埋蔵文化財保護措置が必要と意見が出された。

続いて埋蔵文化財発掘調査の実施について話し合いが持たれた。このとき、工事完了時期が平成22年度中に計画されたことから、埋蔵文化財発掘現地調査も当該年度までに完了する必要性が生じた。しかし、本来の調査主体である県教委はすでに当該年度の全体計画が決まっており、本工事における調査を執行することはできないとのことであった。そこで、県安高事務所は町都計課を介して本工事の埋蔵文化財発掘調査を野々市町教育委員会（当時）（以下、町教委と呼称する。）に依頼したいと打診してきた。

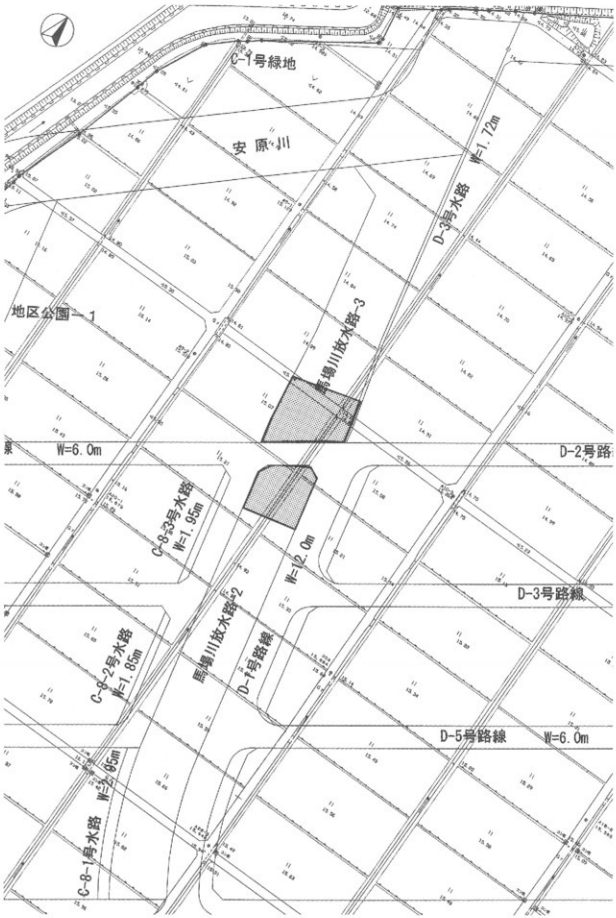
同年11月19日、県安高事務所、県教委、町都計課、町教委との間でこれまでの経過についての話し合い、及び今後の予定等について協議を行い、結果、本工事における埋蔵文化財発掘調査を町教委が引き受けることとなった。その後、県教委が町教委に発掘調査を依頼すること、発掘調査に要した費用は県安高事務所が支払うこと、発掘の現地調査を平成22年度、出土品整理及び報告書刊行を平成23年度に実施すること、現地調査は、平成22年６月以降に実施することが話し合われた。

平成22年５月24日、野々市町二日市町地内の本工事区域内における周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の通知が県教委から町教委に届く。同年５月26日には県教委から町教委に本工事区域内の埋蔵文化財発掘調査等の依頼があり、同年６月７日町教委は県教委に受託事業として実施する旨の回答を出した。（※平成23年11月11日より野々市町は野々市市に変わった。）

第２節　発掘作業の経過

平成22年６月17日、町教委と石川県との間で北西部土地区画整理地区内安原川・Ｃ－１号路線・歯梁工事地内における埋蔵文化財に関する協定書を締結した。同年６月21日には本工事予定地における埋蔵文化財発掘調査の実施計画書を県安高事務所に提出し、その計画書に基づいて、同月同日に野々市町と石川県との間で委託契約を締結した。

現地調査は、８月３日より開始した。調査区の設定をした後、８月４日から大型掘削機により遺物包含層手前までの土砂を掘削し、８月９日に完了した。大型掘削機による表土掘削作業と並行するように８月５日からは、発掘作業員による人力作業が始まった。作業は遺物包含層の掘削をした後に遺構検出をして、遺構の記録を図化しながら遺構の掘削を進めていった。調査を進めていったところ、遺物包含層から想定以上の遺物が出土し、かつ、竪穴建物跡２棟など遺構密度も高いことがわかったため、調査期間は当初予定より延伸した。それでも、10月６日には調査区の遺構すべてを完掘することができた。10月13日からは発掘調査地内の清掃作業を開始し、翌日の10月14日は清掃作業を継続し、終了後、直ちにラジコンヘリコプターによる空中写真測量を実施した。翌15日には、完掘した遺構の個別写真を撮影した。10月19日からは竪穴建物跡貼床の下面を確認し、10月25日にすべての現地調査作業が完了した。



第１図　調査区位置図(S=1/1000)

第３節　整理作業の経過

平成23年６月15日、野々市町は県安高事務所に平成22年度現地調査で発見した出土品や現地調査での記録整理及び報告書刊行を目的とした実施計画書を提出し、その計画書に基づいて野々市町と石川県との間で委託契約を締結した。

出土品整理は、洗浄作業から開始した。洗浄作業は７月16日～８月３日まで行った。８月４日からは記名・分類・接合作業に着手し、８月24日まで実施した。８月25日からは土器・石製品などの遺物実測を開始し、10月13日まで行った。その後、10月14日からは遺構図・遺物実測図のトレース作業を行い、10月31日に終了した。

平成23年７月25日からは出土した金属製品５点の保存処理を専門業者に委託し、平成24年１月31日までに完了した。

平成23年12月からは、報告書の刊行作業を開始した。作業内容は、原稿執筆、図版作成、出土品の写真撮影、報告書の編集・校正で、３月30日までにこれらの作業を終えた。

遺構検出作業

遺構掘削作業

記録図化作業

出土品整理作業

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

野々市市は石川県のほぼ中央、石川平野の要地に位置する。市の大きさは南北約6.7km、東西4.5kmで、県内で最も面積の小さい自治体である。市域は霊峰白山を源とする県下第一級河川手取川によって形成された手取川扇状地の北東部にあたり、扇央部と扇端部の狭間に位置する。本市で最も高い標高地は50m、最も低い地点は10mで、なだらかな緩斜面となる地勢をみせている。

現在の野々市市は平坦な地形が広がっているが、従前は手取川から派生する多くの小河川によって形成された微高地と微低地が混在する地形であった。野々市で人々の生活が認められるのは縄文時代後期前半からで、集落の拠点は標高の高い微高地であった。この時代は扇状地の大部分が未開の原野で、ススキや低木が生い茂る荒地であったようである。これが稲作の伝わる弥生時代から石川平野の中で水田耕作が営まれるようになり、土地の開墾が始まっていった。古代以降、農耕具の発達などにより凸凹の多い土地は次々と開発されていき、未開発地は耕作地として生まれ変わっていった。明治時代以降は、田区改正による耕地整理が各地で急速に広がり、市内全域は起伏のない平坦な地形へと移り変わり、水田区画は碁盤目のように整然となった。このような、大きく広がった田園風景は昭和30年代ころまで見られた。

しかし、昭和40年代の高度経済成長期以降は、県庁所在地金沢市に隣接したまちという地理的条件から、住宅地や商業施設の建設などが著しくなり、急速に水田風景は失われていった。特に、北部の御経塚地区や南部の三納・粟田・新庄地区は区画整理事業が進み、住宅地として生まれ変わっていった。今回、発掘調査箇所となる市域北西部地区も、区画整理事業の一貫として行われており周辺地は大きな変貌を遂げてきている。また、市内の東部には金沢工業大学、南部には石川県立大学といった教育機関が置かれ、若者が多く集う学園都市としての性格も持ち合わせている。

今回の発掘調査地である二日市イシバチ遺跡は、標高約14mで、手取川から派生する小河川によって形成された微高地上に立地する。ただし、市域上流部と比較して、大きな川原石の堆積は少なく、微低地との高低差も大差ないことから、当時の生活拠点の場としては、非常に適した地であったと思われる。

第２節　歴史的環境

二日市イシバチ遺跡周辺の遺跡を中心として、時代別に概観する。

縄文時代

本遺跡より北東方約１kmほどのところには国指定史跡となっている６御経塚遺跡が所在する。御経塚遺跡は、縄文時代後期中葉～弥生時代初頭にかけて営まれた地域における拠点集落である。当遺跡で発見された御経塚式土器は縄文時代晩期前半の基準資料となる。御経塚遺跡の近隣には、縄文時代後期後半～晩期後半の１チカモリ遺跡や縄文時代後期後半～晩期後半の２中屋サワ遺跡といった集落遺跡が点在し、御経塚遺跡の拠点集落を中心に展開した出村的な集落であったようである。これらの遺跡は標高６～10mに立地し、扇状地を伏流する地下水の湧水域であった。また、当時の生活に必要な落葉広葉樹と照葉樹が混在する豊かな林野が大きく広がっていた場所でもあったことから、この地帯は当時の人々にとって生活環境に最適な場であったようである。

本遺跡より南東約２kmのところには、縄文時代晩期の17長竹遺跡がある。長竹遺跡は縄文晩期後半の基準資料となる土器が出土した遺跡で、水田稲作農耕が西日本に波及した極めて重要な時期である。なお、本遺跡の南に隣接する12三日市Ａ遺跡と御経塚遺跡からは、当該時期の稲籾の圧痕のついた土器が出土している。

第２図　野々市市位置図

弥生時代

手取川扇状地一帯における弥生時代の遺跡分布を見ると、前期～中期にかけては極めて少なく、後期に数多く存在する。御経塚遺跡（ツカダ地区）、15乾遺跡からは、柴山出村式と呼ばれる弥生時代前期の土器が確認されているが、この時期は弥生文化の波及が十分ではなく、まだ縄文文化の影響が強く残っていたようである。

弥生時代後期になると、鉄器の普及などを要因とする生産力の向上から人口が増え、それに伴い手取川扇状地一帯にも集落が展開するようになる。本遺跡をはじめ、周辺にある５御経塚シンデン遺跡、御経塚遺跡、７長池ニシタンボ遺跡、三日市Ａ遺跡、13三日市ヒガシタンボ遺跡、10郷クボタ遺跡、14徳丸ジョウジャダ遺跡などからは、竪穴建物や掘立柱建物などで構成される集落跡が見つかっている。これは、農耕社会が急速に広がったことで、安定した農耕地の確保が必要となったため、広範にわたってムラが形成されていったと考えられる。

古墳時代

古墳時代前半については、本遺跡では弥生時代後期からの流れを汲む集落跡を確認することができるが、扇状地上での集落数は一旦収束傾向となる。本遺跡より北方１kmにある御経塚シンデン遺跡・御経塚シンデン古墳群では、弥生集落廃絶後に15基の前方後方墳、方墳からなる大古墳群を造立している。また、本遺跡でも本調査区の西方約200mに一辺約18mの規模を中心とした大小の方墳７基を確認している。

古墳時代後半になると、本遺跡から南方約４kmの市上流域の扇状地扇央部で末松古墳や上林古墳など後期古墳が築かれるようになる。これは河川上流域における開発が広がり始めていったことを意味する。

古代

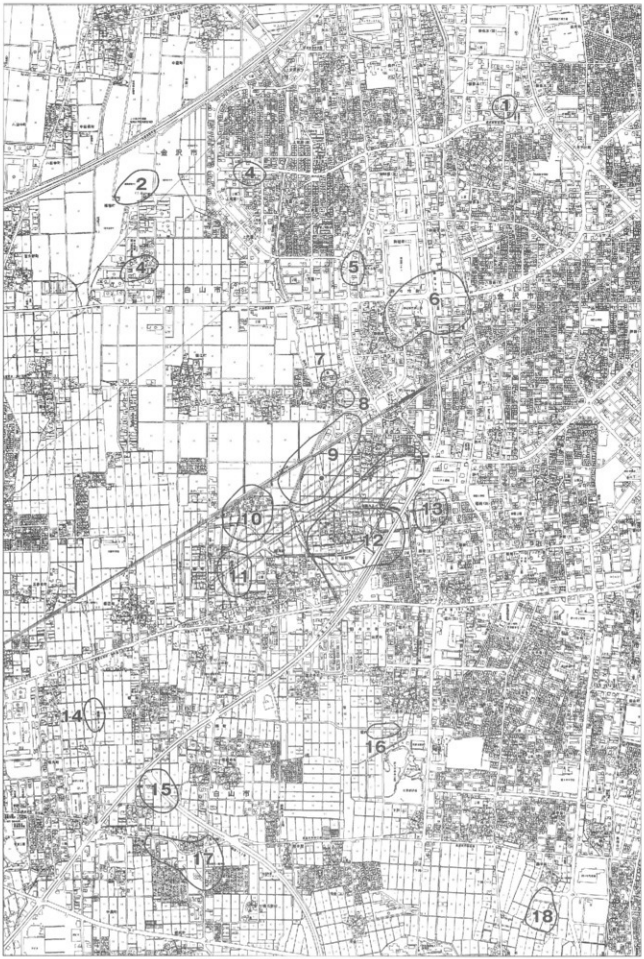
７世紀後半には、手取川扇状地扇央部に、県内最古の古代寺院である末松廃寺が建立される。末松廃寺は、東に塔、西に金堂が置かれた法起寺式の伽藍配置をもち、この寺院建立以降、市内南部地域を含む手取川扇状地扇央部一帯で耕作地開発が急速に進み、特に８世紀後半以降は18藤平田ナカシンギジ遺跡をはじめとする周辺各地に集落が増大していく。扇状地扇端部には、初期荘園の遺跡である３横江荘々家跡、４上荒屋遺跡が所在する。また、三日市Ａ遺跡には、８世紀終り頃に設置した古代の官道である北陸道の跡が見つかり、上記荘園遺跡との関係が指摘されている。

中世

11世紀後半～12世紀頃から、在地領主層の武士団の形成がはかられるようになった。地元武士団である林氏や富樫氏は、手取川扇状地での新開発や再開発に大きな影響を与えた。ただし、市内において現在のところ中世前半にかけての遺跡はあまり多く確認されていない。中世の遺跡が多く認められるようになるのは、富樫氏が加賀国の守護職に任じられ、野市に守護所を置く14世紀頃からである。本遺跡をはじめ、近隣の三日市Ａ遺跡や郷クボタ遺跡、中屋サワ遺跡では、溝で囲まれた中に建物などが配置される散居村のような景観が広がる集落が認められる。また、本遺跡南方1.5kmにある16堀内館跡では、幅1.5m、深さ１mほどの大きな堀で囲まれた屋敷地の跡も確認されている。15世紀以降になると、集落遺跡である８長池キタノハシ遺跡、三日市Ａ遺跡、11徳用クヤダ遺跡では、掘立柱建物、竪穴状遺構などの主要遺構が密集した村落形態を示し、14世紀頃までみられた散村から集村へと大きく変わる様相となる。

近世

現在見ることのできる集落は、近世に成立したと考えられる。御経塚集落内（御経塚遺跡デト地区）や郷町集落（徳用クヤダ遺跡）隣接地での発掘調査でも、近世の遺構・遺物を発見している。また、乾遺跡や、三日市Ａ遺跡からは、当該時期の墓地跡を確認している。



第３図　遺跡の位置と周辺の遺跡（S=1/20000）

番号	遺跡名	種別	時代
1	チカモリ遺跡	集落跡	縄文
2	中屋サワ遺跡	集落跡	縄文～中世
3	横江荘々家跡	荘園	古代
4	上荒屋遺跡	集落跡・荘園跡	縄文～中世
5	御経塚シンデン遺跡 御経塚シンデン古墳群	集落跡・古墳	弥生～中世
6	御経塚遺跡	集落跡	縄文～中世
7	長池ニシタンボ遺跡	集落跡	弥生
8	長池キタノハシ遺跡	集落跡	中世
9	二日市イシバチ遺跡	集落跡	縄文　弥生　中世
10	郷クボタ遺跡	集落跡	弥生　古代　中世
11	徳用クヤダ遺跡	集落跡	古代　中世
12	三日市A遺跡	集落跡	弥生　古代　中世
13	三日市ヒガシタンボ遺跡	集落跡	弥生　古代　中世
14	徳丸ジョウジャダ遺跡	集落跡	弥生　古代
15	乾遺跡	墓地・集落跡	縄文～近世
16	堀内館跡	館跡	中世
17	長竹遺跡	墓地・散布地	縄文～古墳
18	藤平田ナカシンギジ遺跡	集落跡	古代　中世

第1表　周辺の遺跡一覧表

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

調査は、大型掘削機による表土の除去作業からはじめた。重機による掘削は、暗灰褐色土の遺物包含層面手前までとした。重機掘削完了後、人力による掘削作業を行った。人力による作業は、調査区の遺物包含層の掘削から開始した。遺物包含層土中には弥生時代後半から古墳時代前半を中心とした遺物が大量に埋設しており、それらを採取しながら遺構面まで掘り下げた。調査区の一角には遺物が集中する土器溜りの箇所がいくつか見受けられ、そこについては遺物を残し、出土状況の記録を行ってから採取していった。包含層の埋土を除去した後は、調査区南側より遺構面の検出を実施した。遺構検出を実施した後は、遺構の地点を明確にするため遺構略図を作成し、同時に遺構の掘削作業を行った。竪穴建物跡や土坑、溝などの主要遺構については、土層断面図など実測による記録をしてから完掘した。調査区内の遺構完掘後は、清掃作業をして、空中写真測量及び個別遺構の完掘写真を撮影した。竪穴建物については、空中写真測量後貼床面をはずして、その下部にある遺構の検出・掘削作業・記録・完掘写真撮影を行い、現地調査を終えた。

整理作業については、野々市市ふるさと歴史館内にある調査整理室で実施した。作業手順は、出土した遺物を水で洗浄し乾燥させ、乾燥した遺物に遺跡名や出土した地点などを注記した。注記後、一部の遺物を接合及び実測し、この遺物実測図や現地で表記した遺構実測図を製図トレースした。

これらの作業完了後、遺物の写真を撮影し、その後は、原稿執筆、図面・写真のレイアウト等を行って報告書を刊行した。

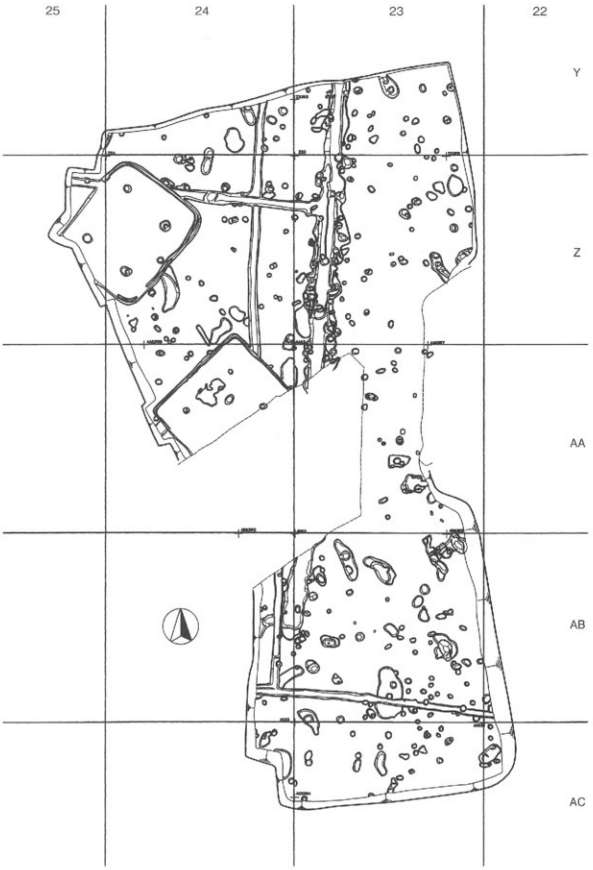
第２節　層　序

層序については、第４図の基本土層図をもとに説明していく。

１は、灰色粘質土をベースとした水田耕作土である。２の橙灰色粘質土は、これら耕作土の整地層にあたる床土である。３の暗灰褐色粘質土は、弥生～古墳時代の遺物包含層に相当する。さらにその下にある黄褐色粘質土は地山面である。

1	灰色粘質土（水田耕作土）
2	橙灰色粘質土（耕作土の整地土）
3	暗灰褐色粘質土（遺物包含層）
4	黄褐色粘質土（地山土）

第４図　基本土層図



第5図　調査区グリッド設定図(S=1/200)

第3節　遺　構

本調査で発見された主要な遺構は竪穴建物跡、掘立柱建物跡、布掘建物跡、土坑、溝などである。時代については、弥生時代後半から古墳時代前半と中世の遺構が調査区内で確認できた。以下は、各主要遺構の個別の概要である。

SI 1（第6～第8図）

調査区北西隅のグリッドZ－24・25で検出された隅丸方形型の竪穴建物である。南西端の一部は調査区外へと延びるため全容は明らかでない。規模は北西－南東方が570cm、北東－南西方が630cm、面積約35㎡である。深さは地山面から約30cmを測る。床面には全般に貼床を施すが、所々薄い箇所がある。また、北東と南東の壁面際には周溝が巡る。周溝は幅12～20cm、深さ約5cmを測る。竪穴内には柱を据えるための穴が4箇所認められる。穴の規模は長径40～60cm、深さは、西側のピットが14cmとやや浅いが、その他は30cm前後と一定の深さをもつ。竪穴廃絶後に堆積した土は黒灰色粘質土、黒褐色粘質土、灰褐色粘質土で、左記の土砂がレンズ上に堆積していることから、時間をかけて自然に埋っていったと考えられる。

出土遺物のほとんどは弥生～古墳時代の土器で、堆積する覆土から出土した。その中で、竪穴北西隅際の地点から第19図9～11の小型鉢型土器が完形に近い状態で見つかった。これらの土器は床面から約10cm直上の標高14.25mから検出されており、竪穴廃絶後まもなく、祭祀用として人為的に置かれたものと推測する。また、竪穴中央部やや東寄りからは第19図の5と6の高杯杯部が出土した。これらの土器も人為的に置かれたと思われるが、層1の覆土が床面より15cm程堆積した上からの出土のため、竪穴灰絶後長時間が経過してから置いたものと考えられる。

竪穴の貼床面を取り外したところ、その下から不定形の穴が複数確認された。これらの穴は、深さ5～15cmで、人為的に掘られたものとは考えにくく自然に生じた穴と推察される。

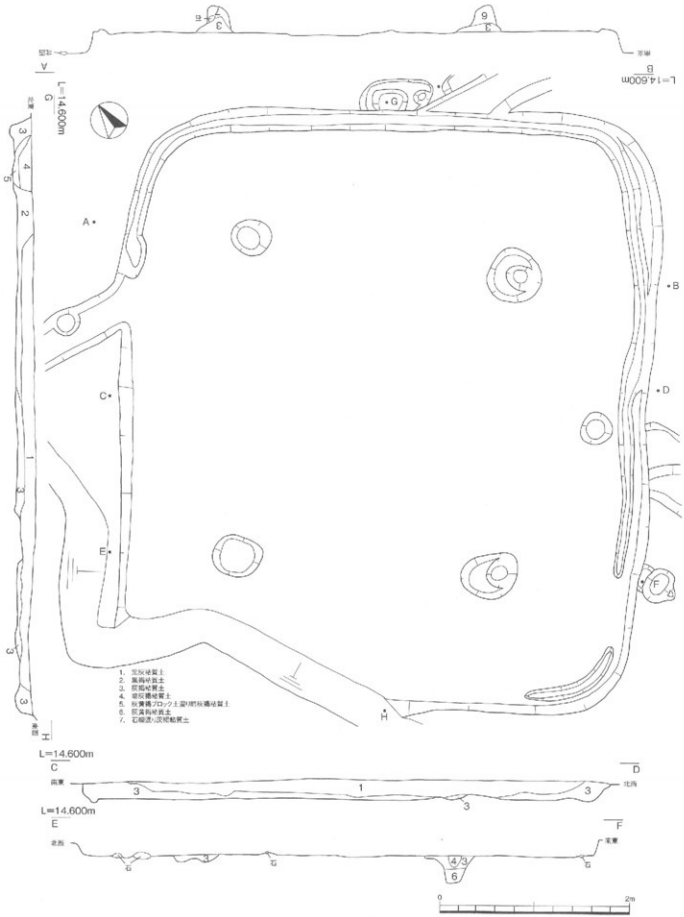
SI 2（第9～第11図）

調査区中央部より西側のグリッドAA－24に所在し、一度大きな建替えが認められた竪穴建物である。平成18年度の発掘調査の際、本竪穴の南半分が検出され、今回の調査で北半分を確認したことで全容が明らかとなった。

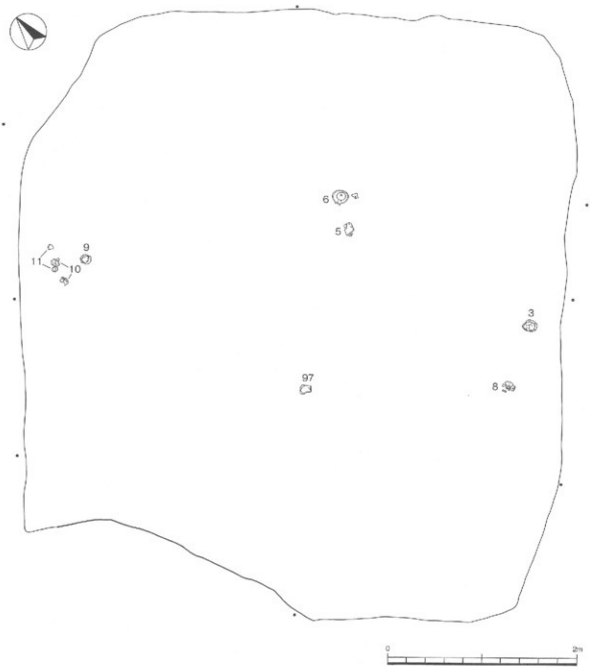
当初構築された竪穴は方形プランで、規模は北東－南西ラインが445cm、北西－南東ラインが420cm、深さ地山面から28～38cm、面積が約18.7㎡である。床には厚さ4～12cmの貼床が施されている。竪穴内部には4基の柱穴が認められる。柱穴はほぼ円形を呈し、竪穴コーナーから160cm前後中に入ったところに設置している。規模は直径40cm前後、深さは35～65cmを測る。この柱穴の下部構造を確認するため貼床を外したところ、直径50～75cmの柱穴掘り方を確認したことから、貼床を施す前に柱穴を掘り、柱を据えたと考えられる。また、平成18年度調査箇所となる竪穴南東側中央部から方形の土坑1基を検出した。土坑の規模は一辺70cm×55cm、コーナーはやや丸みを帯びた隅丸型をし、床面からの深さは30cmである。土坑の周囲には貼床を周囲よりも高く構築しており、土坑内に水など入らないよう工夫している。

建替え後の規模も方形プランで、規模は北西－南東方が620cm、北東－南西方が546cm、深さは地山面から10～25cmを測る。面積は約33.5㎡で、床には厚さ4～12cmの貼床が施されている。竪穴内部には3基の柱穴と土坑1基が認められた。柱穴は3基とも円形で、直径25～30cm、深さは床面から30cm前後を測る。南西側の柱穴は確認できなかったが、後述するSB1と重複する箇所にあったことから、穴は存在していたものと思われる。土坑は、改修前の竪穴に見られたものと同様、南東側の中央部に掘られている。土坑は40cm×30cmの楕円形で、60cmの深さをもつ。本調査区SD1の溝と切りあっており、詳細なプランなどは明らかでない。土坑の周囲には幅20～25cm、深さ5cmの溝が囲んでいる。竪穴廃絶後に堆積した土は黄褐色ブロック土混り黒灰色粘質土、暗灰褐色粘質土、灰黄褐色粘質土が壁面際から順次埋っていく。これらの土はレンズ状に堆積しており、自然に埋っていったと想定される。

遺物は建替え後の竪穴が廃絶した後に埋設した土から弥生時代終末期～古墳時代初頭の土器が出土しているが、総体的には少ない。

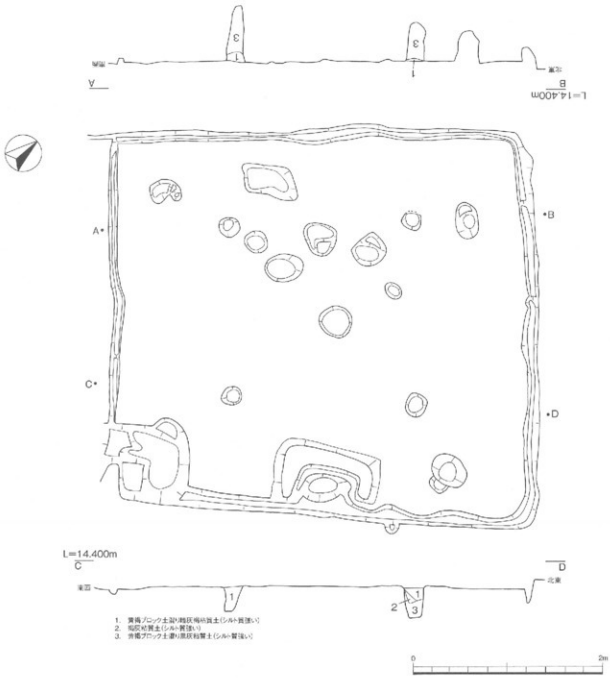


第 6 図　SI 1 遺構図・土層断面図（S=1/40）

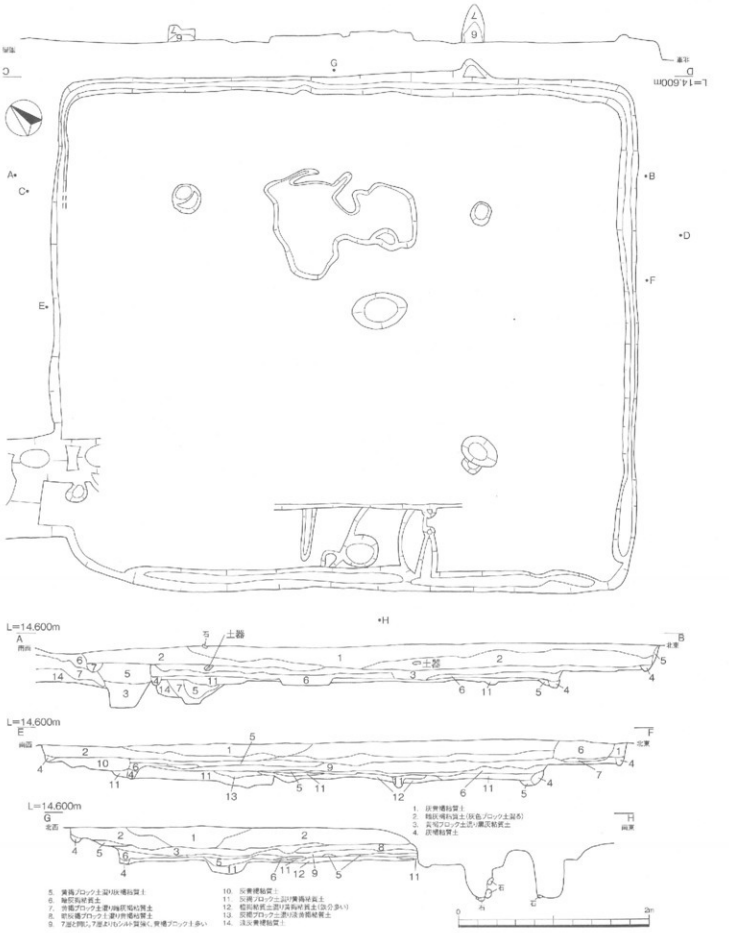


第７図　SI１遺物出土状況図(S=1/40)

第8図　SI1 貼床下面遺構図(S=1/40)



第９図　SI２（改修前）遺構図・土層断面図（S=1/40）



第10図　SI 2（改修後）遺構図・土層断面図(S=1/40)

SB１（第11図）

調査区中央部西側、グリッドAA－24内のSI２に接する布掘建物である。切り合いの状況からSB１廃絶後にSI２が構築されたことが判明している。なお、SB１の南側桁行は平成18年度調査で全容を明らかにしている。

平成18年度調査による南側桁行は３間で、長さ約650cm、幅約105cmの溝の中に直径100cm前後の柱穴が掘られている。また、柱穴は少し位置をずらした状態で掘り直されており、規模は変わらずに一度建替えを行っていたようである。

今回の調査では北側桁行の一部を確認した。検出した箇所は北側桁行の東半分で、残りの西半分は調査区外に延びる。長さ200cm以上、幅約60cm、深さ約40cmの溝の中に３基の柱穴を確認した。東端にあたる柱穴P３は72×64cm隅丸方形をしており、穴内には地山面から50～60cmの深さを持つテラスが４基認められる。穴の最深部は地山面より78cmを測る。P３の西隣のP４は直径45cm隅丸方形のプランをしており、地山面より71cmの深さをもつ。西端のP５は一部調査区外へと延びており全貌を確認することはできない。長方形のプランをもち長辺50cm以上、短辺40cm、深さ地山面より60cmを測る。穴の位置などからP３とP５は同時期のものと推測される。なお、穴に堆積した土は黄褐色ブロック土混り黒灰色粘質土・黄褐色ブロック土混り灰褐色粘質土・黄褐色ブロック土混り暗灰褐色粘質土・暗灰褐色粘質土・淡灰黄褐色粘質土と複数の土層が確認された。

SB２（第12図）

調査区北端、グリッドY及びZ－24内で確認した東西２間、南北２間以上の掘立柱建物である。建物は調査区外北方へと延びるため全容はわからないが、南北が桁行となりそうである。方位はN３°Eである。規模は東西470cm、南北500cm以上、面積は23㎡以上である。東西の１間分の長さは170cmと185cm、南北の１間分の長さは東面の１箇所だけ確認でき、330cmを測る。なお、南北ラインの西面では柱穴を確認できていない。柱穴は円形・楕円形をし、直径30～55cm、地山面からの深さ25～48cmを測る。土器は確認できていないが、建物の形態等から中世の時期と考える。また、穴の覆土は黄褐色ブロック土混り暗灰褐色粘質土及び黄褐色・灰褐色ブロック土混り暗灰褐色粘質土で、柱痕跡は確認できなかった。また、南東隅の柱穴にあたるP２からは、第24図112の鉄製小刀が出土している。小刀は出土状況から祭祀行為によって埋められたものかもしれない。

SB３（第13図）

調査区南端グリッドAB－23内で検出した東西２間・南北１間の掘立柱建物である。方位はN８°Eである。南側柱列はSD４と接し、切り合いからSB３が新しいことがわかっている。規模は東西長390cm、南北長130cm、約５㎡の床面積をもつ。東西桁行１間分の長さは162～170cmである。柱穴は円形をし、大きさは直径22～35cm、深さ38～58cmを測る。時期は中世と考えられる。穴の覆土は黄褐色ブロック土混り暗灰褐色粘質土と黄褐色・灰褐色ブロック土混り暗灰褐色粘質土で、柱痕跡は確認できなかった。

SA１（第13図）

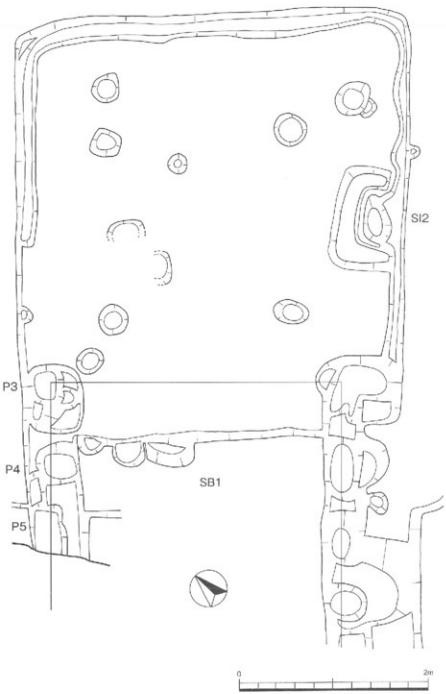
調査区南端、グリッドAB－23で確認した東西ラインの柵列で、SB３の建物内に入りこんでいる。長さは760cm、柱穴の数は４基で１間分の長さは東から244cm、144cm、280cmである。穴の大きさは円形及び楕円形で、直径20～34cm、深さ20cm前後であるが、東から３番目の穴は50cmと突出した深さをもつ。穴の覆土は黄褐色ブロック土混り暗灰褐色粘質土と黄褐色・淡灰褐色ブロック土混り暗灰褐色粘質土で、柱痕跡は認められなかった。

SK１（第14図）

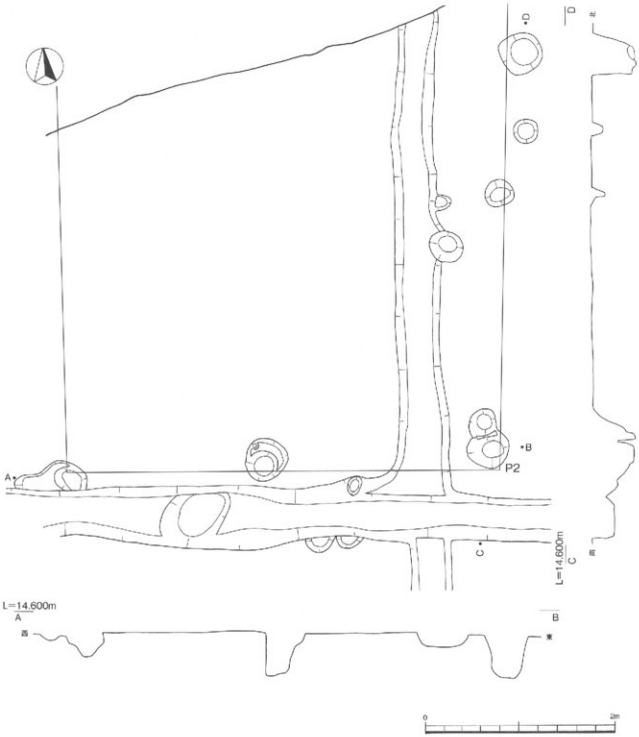
調査区北東端、グリッドZ－23内で確認した南北に長い楕円形の土坑である。南北長114cm、東西長83cm、地山面からの深さ11cmを測る。第19図19の器台杜状部が出土した。埋土は黒灰褐色粘質土１層である。

SK２（第14図）

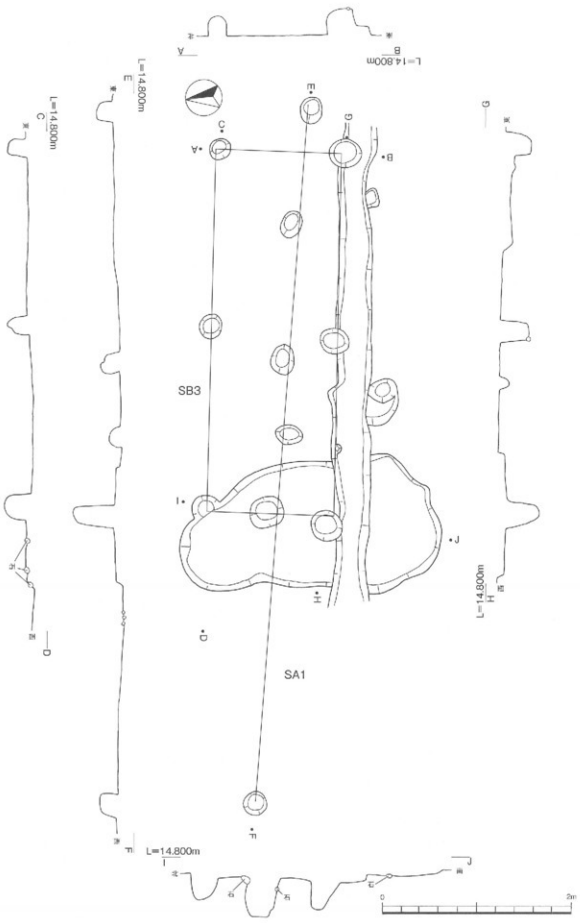
調査区中央部からやや南東方に向かったグリッドAB－23内に位置する。プランは、本来北東－南西が長い長方形であったようだが、周囲にある不定形な遺構が切り合うことで形状が歪になってしまっている。大きさは長辺116cm、短辺50cmで、内部はテラスや小ピットが錯綜している。最深部は地山面から27cmである。堆積覆土は灰褐色粘質土、暗灰褐色粘質土をベースとした土で、これらが順次時間をかけて埋っていく。また、上層にあたる層１の暗灰褐色粘質土からは第19図20を含む土器片が複数見つかった。出土地点の高さは平均14.50mで、周囲の地山面とは大差ない。



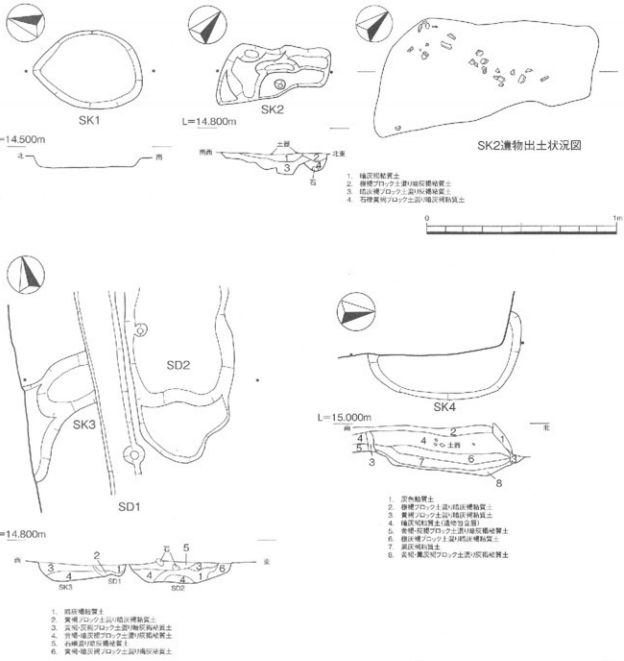
第11図　SI 2（改修前）貼床下面、SB 1 遺構図（S=1/40）



第12図　SB２遺構図・断面図(S=1/40)



第13図　SB３、SA１遺構図・断面図(S=1/40)



第14図　SK 遺構図・土層断面図(S=1/20(SK 2 遺物出土状況図のみ 1/40))

SK 3（第14図）

調査区中央部から南西方、グリッドAB－24にある土坑である。SD 1に切られているため全容は明らかでないが、形状は東西に長い楕円形と考えられる。規模は東西長62cm以上、南北長56cm、深さ18cmを測る。埋土は黄褐色・暗灰褐色ブロック土混り灰褐色粘質土と黄褐色・灰褐色ブロック土混り暗灰褐色粘質土の2層で、中から第19図21の土器片が出土している。

SK 4（第14図）

調査区南西隅のグリッドAC－24内で確認した土坑で、西側半分は調査区外となり全容は明らかでない。南北に長い隅丸長方形をしたプランで、南北長160cm、東西長90cm、遺構面からの深さ23cmを測る。堆積覆土は黄褐色・黒灰褐色ブロック土混り灰褐色粘質土、黒灰褐色粘質土、橙灰褐色ブロック土混り暗灰褐色粘質土で、これらが順次レンズ状に埋っていく。なお、土層中から第19図22、第20図23～26の土器が出土した。また、SK 4周囲一帯の包含層にあたる暗灰褐色土層中からも土器が一括集中して見つかった。（土器溜り3第18図参照）

SK 5（第14図）

調査区南東隅のグリッドAC－22とAC－23がまたがる箇所で確認した隅丸長方形の土坑である。北東－南西の長辺約120cm、北西－南東の短辺約68cm、深さは最深部で24cmを測る。埋土は暗灰褐色粘質土をベースとした土が複数層堆積する。中からは第20図27の土器が出土した。

SD 1（第15図）

調査区の中央、グリッドY－24・Z－24・AA－24・AB－24内を南北に走る溝である。調査区内で確認された長さは約31m、北側は調査区外へと延びる。南側は東西溝SD 4とぶつかって終焉する。溝幅は35～50cm、深さは地山面から10～26cm、流路となるような高低差はない。覆土は灰白色・黄褐色ブロック土混り暗灰褐色粘質土1層で、途中で交差する東西溝SD 3とは切り合いからSD 1の方が新しいことがわかった。

SD 2（第15図）

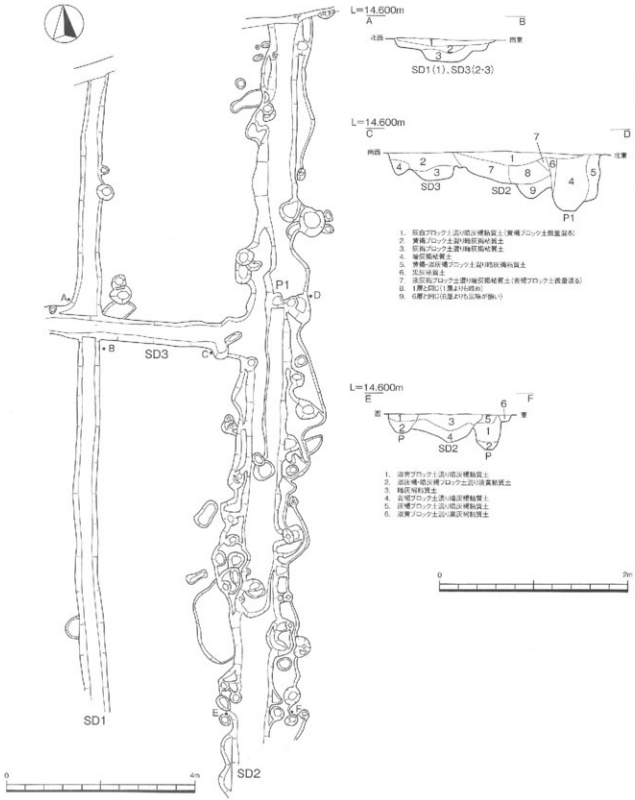
調査区中央を南北に走る溝で、グリッドY－23・Z－23・AA－23・AB－23・AB－24内を通る。SD 1より東へ約1m離れたところに位置する。調査区内における溝の全長は29.7m、幅70～120cm、深さ25～40cmを測る。流路となるような高低差は認められない。北側は調査区外へと延び、南側は東西溝SD 4の手前、南北溝SD 1に接するようにして途切れる。グリッドZ－23で交わるSD 3とは切り合いから本溝の方が新しいことが判明している。覆土は暗灰褐色粘質土をベースとした土が複数層堆積している。また、溝の両側には直径20～60cm、深さ20～60cmの小穴群が乱立するように認められる。これらの穴の覆土も黄褐色や灰褐色などのブロック土が入った暗灰褐色粘質土である。

SD 3（第25図）

調査区北側、グリッドZ－23～25で認められる東西に走る溝である。西側が調査区外へと延び、東側は南北溝SD 2と接して終焉する。調査区内で確認できる長さは約13m、幅は45～70cm、深さは地山面から15～25cmを測る。堆積している土は灰褐色ブロック土混り暗灰褐色粘質土と黄褐色ブロック土混り暗灰褐色粘質土の2層である。切り合いから南北溝SD 1・SD 3よりも古いことがわかっている。明確な高低差は確認できていない。

SD 4（第25図）

調査区南側、グリッドAB－22～24で検出した東西溝である。西側、東側それぞれ調査区外へと延びていく。調査区内で確認できる長さは約12.6m、溝の幅は30～40cm、深さは地山面より8cm前後、流路となる高低差は認められない。交差する南北溝SD 1との堆積覆土は同一であることから両溝は同時併存と推察される。なお、柱穴が接する東西棟のSB 3とは、切り合いからSD 4が古いことが判明している。



第15図　SD、P 遺構図(S=1/80)・土層断面図(S=1/40)

本調査では、遺物包含層にあたる暗灰褐色粘質土層中から弥生時代後期～古墳時代前期の土器が密集して出土したエリア３箇所を確認した。以下、３箇所の土器溜りについて概観する。

土器溜り１（第17図）

グリッドZ－23・24内のSI２の北東側、東西約８m、南北５mの範囲で確認された。この範囲の中において、Ⅰ群からⅤ群の土器が集中するエリアに小区分される。各群と群の間隔は約１m、ひとつの群の大きさは約0.5m～２mほどである。土器群のレベルは平均14.60mほどで、地山面から約20cm上方にあたる。発見された土器はすべて割れており、１個体に復元できるものは１点もなかった。

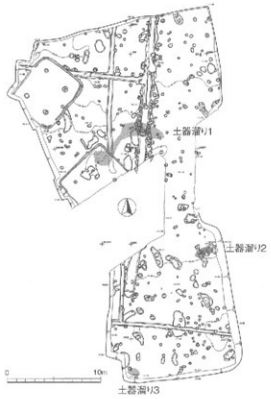
土器溜り２（第18図）

グリッドAB－23のSK２の上部に集中して見つかった土器群である。範囲は東西1.8m、南北1.1mで高さは平均14.63m、出土した箇所の覆土は暗灰褐色粘質土である。発見された土器はすべて割れており、復元できるものはなかった。

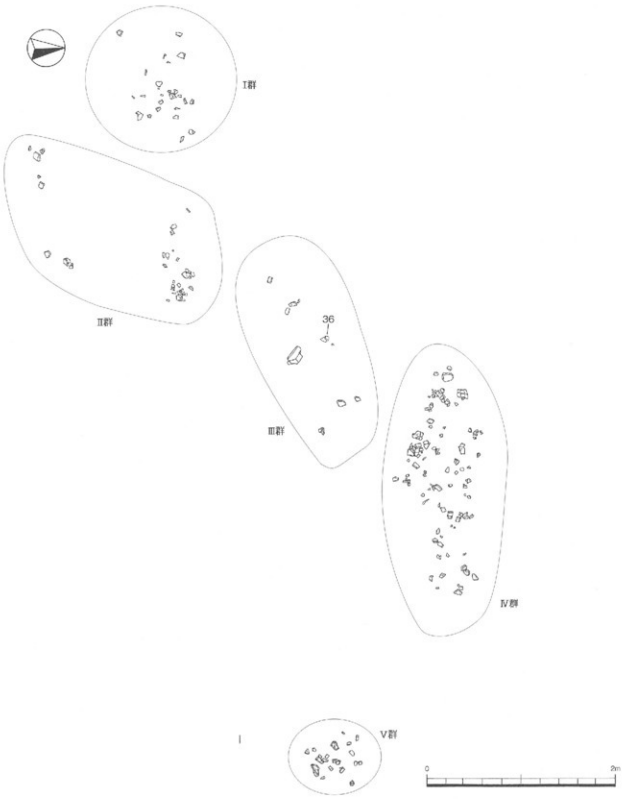
土器溜り３（第18図）

グリッドAC－23とAC－24をまたがる箇所で確認された土器群で、SK４に近似するところに位置する。土器群は東西約１m、南北約１mの範囲をもち、遺物包含層となる暗灰褐色粘質土層中で確認した。高さは平均14.85m、地山面より約20cm高い位置の地点となる。土器は甕や高杯などの破片が散在する状態で見つかっており、１個体になりうるものはなかった。また、この土器溜り３より２m東方で第22図の中世土師器皿90を発見した。この土器も暗灰褐色粘質土層上にあり、レベルは14.83mを測る。

また、図示していないが、本調査で出土した石製品のほとんどは遺物包含層である暗灰褐色粘質土層からのもので、レベルは上述した土器溜りの高さとほぼ同じである。



第16図　土器溜り出土位置図（S=1/400）



第17図　土器溜り１遺物出土状況図(S=1/40)

第18図　土器溜り2・3遺物出土状況図(S=1/40)

第4節　遺　物

出土遺物については、弥生時代、古墳時代、古代、中世の4時期のものが出土している。

1～11はSI1から出土した土器である。1～4は甕で、1は有段口縁で口縁部に擬凹線をもつ「月影式」系在地土器である。2は口唇部を肥厚させた畿内「布留系」甕である。3は口縁部が「く」の字をした小型甕で、古墳時代前期前半にあたる。5と6は高杯の杯部である。6は器形から椀形土器になる可能性もある。また、内面全般には暗文を施し、底部は意図的に穿孔したと思われる穴があいている。両土器は竪穴中央付近でまとまって見つかった。時期は古墳時代中期以降である。7は小型器台の上部、8は器台の脚部にあたる。古墳時代前期前半に位置づけられる。9～11はSI1の壁際に集中して見つかった。いずれも完形品に近く、祭祀に使用したと考えられる。なお、3個体の中で11だけが穿孔をしている。時期は古墳時代前期後半と考えられる。

12～18はSI2から見つかった土器である。12は古墳時代前期初頭に位置づけられる甕の口縁部である。13は弥生時代後期後半の長頸壺の一部で、内外面に赤彩を施す。14と15は高杯の杯部で、14は内面全体が黒色をしている。15の高杯は弥生時代後期終末の「月影式」の時期と思われる。16～18は器台形土器で、17は弥生時代後期終末の「月影式」、16と18は古墳時代前期前半に位置づけられる。

土坑やピートからの出土土器19～28は、SK2から見つかった20の「布留系」甕の口縁部以外は、弥生時代後期後半から後期終末のものと考えられる。

29～37は土器溜り1、38～44は土器溜り2、45・46は土器溜り3から出土した土器である。弥生時代終末期から古墳時代前期前半までと幅広い時期のものが見つかった。なお、39の弥生時代終末期の壺の内面頸部からはモミ圧痕が確認された。

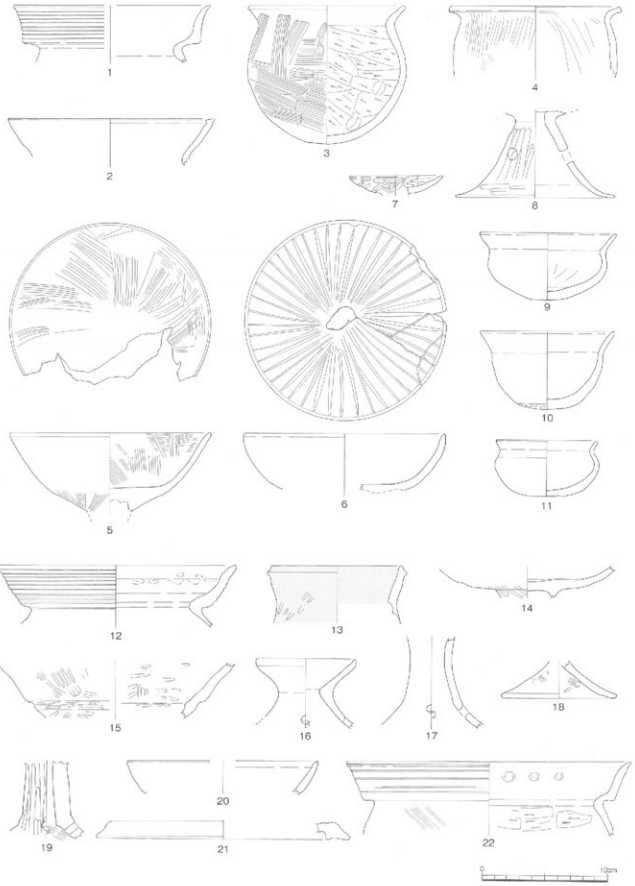
47～86は調査区包含層で出土した土器である。甕は擬凹線のある有段口縁のものが多く、高杯脚部も当該時期の弥生時代終末期が主体となる。

87と88は須恵器蓋である。9世紀前半と考えられる。89は吉岡編年Ⅳ期の珠洲焼擂鉢、90は大型の土師器皿である。時期は14世紀頃と思われる。

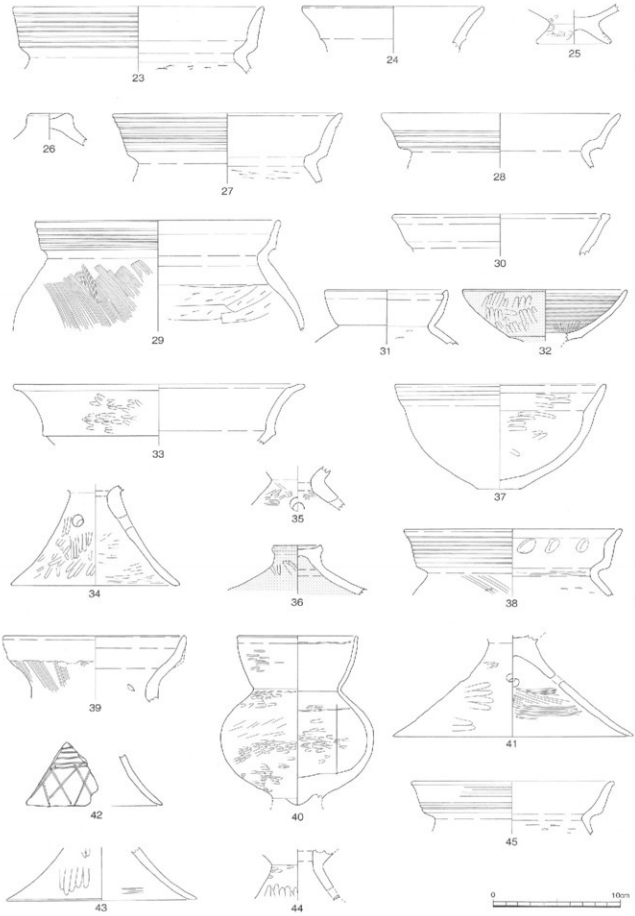
石製品は91～108までである。第23図91～101は石鏃である。91は基部から刃部へ向かって幅を広げ、長軸中ほどで括れるCタイプである。基部は緑が丸みを帯びる円基で、刃部は緑が丸みを帯びる円刃である。刃全体に使用痕が認められ、一部は欠損している。92は91と同様Cタイプで、長軸中ほどの括れが小さいC1にあたる。基部は円基、刃部は円刃である。刃先は丸みをしており、磨耗痕と思われる。93は基部から刃部へ向かって幅が広がり、途中で括れることのないBタイプである。基部は円基、刃部は緑がゆるやかに張り出す外湾刃である。刃先は潰れており、使用した痕跡がうかがえられる。94も93と同様Bタイプである。基部は緑が直線的な直基で、刃は円刃である。また、刃緑は偏刃で刃先は全体的に磨耗している。95はBタイプの大型品であるが、中ほどで折れており基部の状況はわからない。刃部は円刃で、刃先の一部は欠損していることから、使用途中に部位が折れたと考えられる。96はCタイプであるが、基部の箇所にあたる全体の3分の1は消失している。刃部は緑が突出する凸刃で、刃先の磨耗は顕著に認められない。97と98は基部から刃部に向かって幅が広がるBタイプであるが、基部と刃部が欠損しており、形状の分類はできない。99は刃部のみ確認できた石鏃で、全形の分類はできない。刃は円刃で、磨耗痕跡は認められない。100と101は石鏃の基部である。全形の分類は判断できないが、基部については100が直基で、101は円基である。

102～104は磨石である。102は剥離しているが、大型の部類になるので手持ちではなく握え置いた状態で使用したと思われる。105は敲石であるが、一部で磨った痕跡も認められる。106は鉄石英の石核で、全体的に敲打痕が認められる。107は軽石で一部研磨した箇所が認められる。108は山域の鳴滝産と思われる仕上げ砥石である。

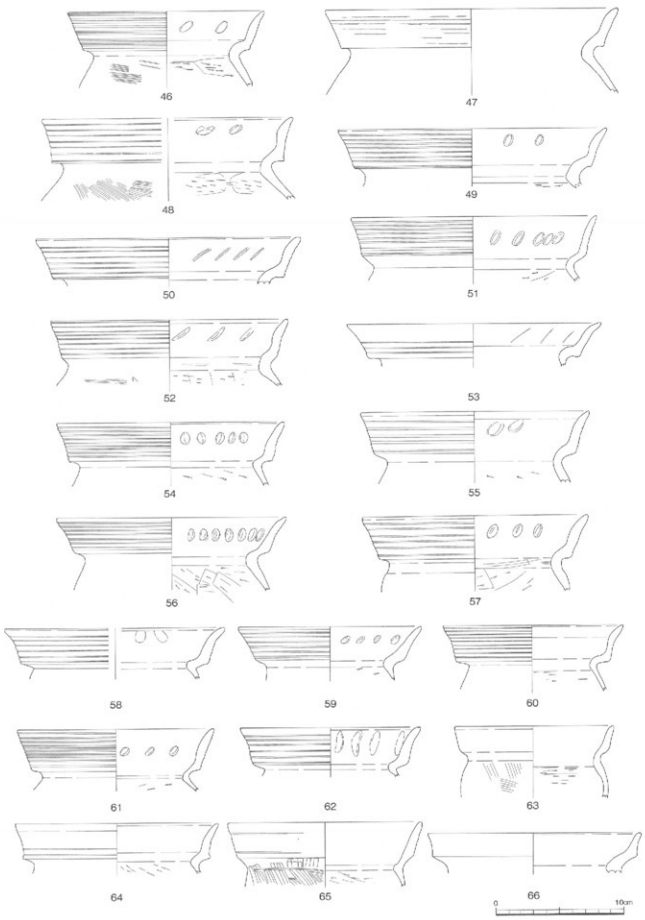
鉄製品は109～114である。109は棒状の製品で、先端部は人為的に屈曲している。110と111は釘である。両者とも欠損している。112は小刀である。最大長18.9cmの直刀である。なお、本遺跡の平成18年度調査でも別の箇所から同タイプの小刀1点が出土している。



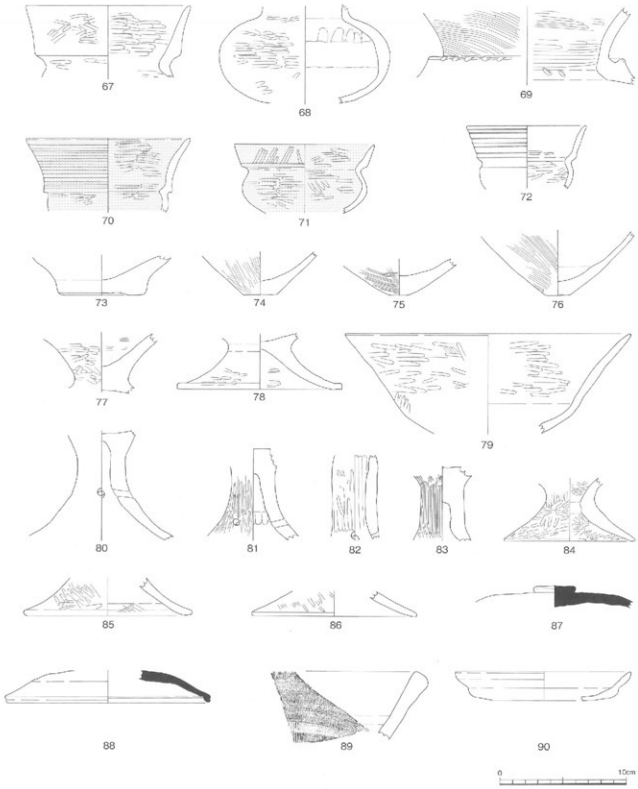
第19図　土器実測図1（S=1/3）



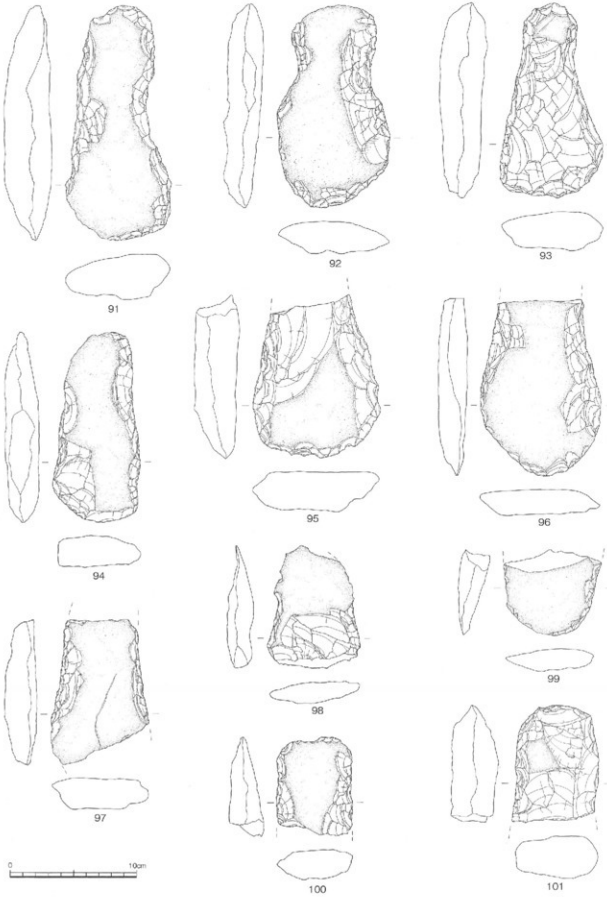
第20図　土器実測図２（S=1/3）



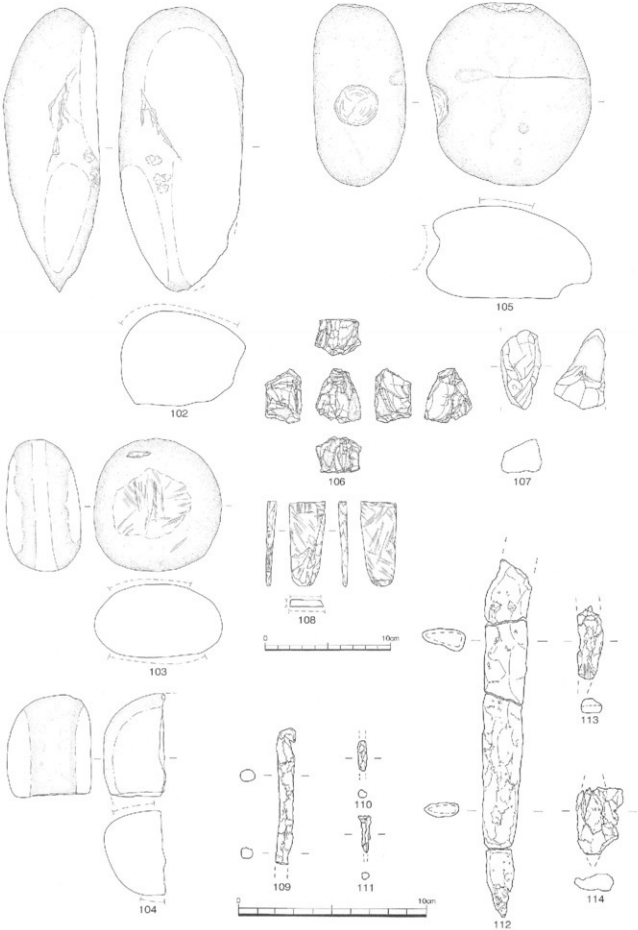
第21図　土器実測図３（S=1/3）



第22図　土器、陶器実測図(S=1/3)



第23図　石製品実測図(S=1/3)



第24図　石製品、鉄製品実測図(石 S=1/3、鉄 S=1/2)

第4章　総　括

本調査区では、弥生時代から中世にかけての遺構・遺物を確認することができた。以下、各時代についての様相について述べる。

弥生時代～古墳時代

本調査区において最も遺構・遺物を確認できた時期である。

調査区北西側で検出した竪穴建物SI１の覆土内から多量の土器が出土した。しかし、土器の時期については弥生時代中期から古墳時代中期までと非常に長い時間幅をもっていた。４の甕は弥生時代中期、１の甕は漆町４群となる弥生時代終末期にあたる。３の甕と８の器台は古墳時代前期初頭の漆町７・８群、２の甕と９～11の小型鉢は漆町９・10群、５と６の高杯は古墳時代中期と思われる。竪穴の機能した時期については、遺物が堆積した状況などを考えると、９～11の小型鉢が竪穴廃絶後すぐに入り込んだ土器となることから、布留併行期の古墳時代前期後半と考える。

SI２は、改修が認められた方形プランの竪穴建物跡である。出土した土器について、13の壺は弥生時代後期、14の脚部は月影式段階となる弥生時代終末期、12の甕は白江式となる漆町５群、16の器台及び18の脚部は漆町８群の土器と考えられる。出土土器についてはSI１と同様、時間幅をもつが、竪穴のプランと土器の出土状況などから漆町８群の古墳時代前期前半にあたると考えたい。また、この竪穴の構築以前はこの地にSB１の大型の布掘建物が建てられていた。布掘建物の時期は、出土土器から月影式段階の弥生時代終末期と推測でき、その廃絶後に竪穴建物SI２を構築している。この布掘建物SB１の梁行の長さと、その後に建てられるSI２の方形プランの長さは同一であった。これは、布掘建物の設計プランを踏襲して竪穴建物を構築したと考えられる。

本調査区では、包含層から弥生時代後期後半から古墳時代前半にかけての土器が大量に見つかった。本区周辺では過年度に発掘調査を実施しており、そこから当該時期の竪穴建物跡や掘立柱・布掘建物跡を複数確認している。今回見つかった大量の土器は周辺地に存在する集落跡で使用され廃棄されたものと理解したい。

古代

86と87は須恵器蓋である。本調査区では古代における遺構は確認していない。周辺での調査地においては、耕作地と想定される畝溝を認めることができる。本遺跡における古代の位置づけは、耕作地エリアにあたると考えられる。

中世

中世においては、SB２・３の掘立柱建物跡と南北・東西ラインの溝を検出した。SB３は建物として規模は小さく、居住施設には不向きである。また、出土遺物も希薄であった。平成18年度調査において、本調査区の南西側では14世紀を中心とした集落跡を確認している。本調査区はその集落の縁辺部にあたり、SB３などは作業小屋か物置など簡素な施設であったと考えられる。溝については宅地間の境界及び排水施設と推測する。なお、溝はSD３→SD２→SD１・４と造り替えがなされている。これは、集落を含む土地利用のあり方に大きな変化があったと推察される。

註　遺物の年代決定及び所見については以下の文献を参考にした。

垣内光次郎　1999「石の文化誌」『中世北陸の石文化Ⅰ』北陸中世考古学研究会
柿田祐司　2006「加賀・能登の様相」『中世北陸のカワラケと輸入陶磁器・瀬戸美濃製品』北陸中世考古学研究会
田嶋明人　1986「Ⅳ考察　漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター
田嶋明人　1988「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム　北陸の古代土器研究の現状と課題』石川考古学研究会　北陸古代土器研究会
田嶋明人　2006「「白江式」再考」『古岡康暢先生古希記念論集　陶磁器の社会史』桂書房
藤田邦夫　1997「中世加賀国の土師器様相」『中近世の北陸－考古学が語る社会史－』桂書房
堀大介　2006「古墳成立期の土器編年に関する基礎的研究」『越前町文化財報告書Ⅰ』越前町教育委員会
河合忍　安英樹　1999「石鏃雑考」『石川県考古資料調査・集成事業報告書　農工具』石川考古学研究会
古岡康暢　1994『中世須恵器の研究』　吉川弘文館

第２表　土器・陶器観察表

実測番号	グリッド / 遺構	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調(内) / 色調(外)	調整(内) / 調整(外)	残存率	備考	番号
1	Z25 SI 1	甕	(15.5)			橙 黒褐	ヨコナデ、擬凹線８条	口縁部１/12	赤色酸化粒あり	17
2	Z24～25 SI 1	甕	16.3			にぶい黄橙、灰黄褐 にぶい黄橙	ヨコナデ ヨコナデ	口縁部１/６		12
3	Z23 SI 1	甕	12.4	11.0	2.0	にぶい黄橙 灰黄褐	ヨコナデ、ケズリ、ナデ、指頭圧痕 ヨコナデ、ハケ、ナデ	口縁部４/９	黒色粒あり	7
4	Z24～25 SI 1	甕	13.7			にぶい黄橙 にぶい褐	ヨコナデ、ハケ、ナデ ヨコナデ、ハケ	１/６	石英粒あり	16
5	Z24 SI 1	高杯	16.0			橙 にぶい橙	ヨコナデ、ハケ ヨコナデ、ハケ	口縁部２/３		8
6	Z24 SI 1	高杯	16.0			橙 橙	ヨコナデ ヨコナデ	口縁部完形	内面暗文	9
7	Z24～25 SI 1	小型高杯	7.4			にぶい橙 にぶい橙	ミガキ ミガキ	杯部１/４	赤色酸化粒あり	18
8	Z24～25 SI 1	鼓台			13.2	にぶい橙 にぶい橙	ヨコナデ ミガキ	底部１/３	赤色粒、黒色粒あり 透かし穴３ヶ所	10
9	Z25 SI 1	小型鉢	10.8	5.3	4.0	にぶい黄橙 にぶい黄橙	ヨコナデ、ナデ ヨコナデ、ナデ	口縁部１/３	内面に縦状工具痕あり	13
10	Z25 SI 1	小型鉢	10.7	6.2	4.8	にぶい黄橙 にぶい黄橙	ヨコナデ、ナデ ヨコナデ、ナデ、ケズリ後ナデ	口縁部２/３、体部３/４		14
11	Z25 SI 1	小型鉢	8.0	4.4	3.0	橙 橙	ナデ ナデ	口縁部１/３、体部８/９	赤色酸化粒あり	15
12	AA24 SI 2	壺	18.8			橙、にぶい橙 褐	ヨコナデ、指頭圧痕 ヨコナデ、擬凹線９条	口縁部１/４	赤色酸化粒あり 外面に煤付着	41
13	AA24 SI 2	壺	10.4			にぶい橙、赤彩 にぶい橙、赤彩	ナデ ナデ、ミガキ	口縁１/８	赤色粒あり	38
14	AA24 SI 2	高杯				にぶい黄橙 黒褐	ナデ ナデ、ミガキ	小片	赤色粒あり 外面に煤付着	26
15	AA24 SI 2	高杯				にぶい黄橙 にぶい黄橙	ミガキ ハケ、ミガキ	小片	赤色酸化粒あり	42
16	AA24 SI 2	器台	8.0			橙 橙	ヨコナデ ヨコナデ	口縁部２/３	透かし穴４ヶ所	36
17	AA24 SI 2	器台				浅黄橙 浅黄橙		脚部小片	透かし穴２ヶ所	44
18	AA24 SI 2	器台			9.2	にぶい黄橙 橙	ミガキ ミガキ	底部１/９		37
19	Z23 SK 1	器台				にぶい橙 にぶい黄橙	ナデ、ハケ ミガキ	脚部完形	透かし穴４ヶ所	11
20	AB23 SK 2	壺	(15.0)			にぶい黄橙 にぶい黄橙、灰黄褐	ヨコナデ ヨコナデ	口縁部小片		28
21	AB24 SK 3	器台			20.2	浅黄橙 浅黄橙	ヨコナデ ヨコナデ	底部１/６	黒色粒あり	27
22	AC24 SK 4	壺	22.4			浅黄橙 淡黄	ヨコナデ、指頭圧痕、ケズリ ヨコナデ、ハケ、擬凹線５条	口縁部小片	赤色粒、黒色粒あり	29
23	AC24 SK 4	甕	19.8			浅黄橙、にぶい橙 にぶい橙	ヨコナデ、ケズリ ヨコナデ、ナデ、擬凹線８条	口縁部１/９	赤色粒、黒色粒あり	32
24	AC23 SK 4	壺	14.4			橙 にぶい黄橙、にぶい黄橙		口縁部１/６	赤色粒あり	33
25	AC24 SK 4	台付壺			6.0	橙 にぶい黄橙	ナデ ナデ、ミガキ	底部ほぼ完形	黒色粒微量あり	31

実測番号	グリッド 遺構	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調(内) 色調(外)	調整(内) 調整(外)	残存率	備考	番号
26	AC24 SK 4	壺				橙 にぶい橙、橙	ナデ ナデ	頂部完形	赤色粒微量、黒色粒あり	30
27	AC22 SK 5	壺	17.5			浅黄橙 浅黄橙	ヨコナデ、ケズリ ヨコナデ、ナデ、凝回線8条	口縁部1/9	赤色粒あり	35
28	Z23 P 1	甕	18.8			にぶい黄橙 にぶい黄橙	ヨコナデ ヨコナデ、擬凹線4条	口縁部1/9	赤色粒あり	2
29	Z24 土器溜り1	壺	19.4			浅黄橙 浅黄橙、にぶい橙	ヨコナデ、ケズリ ヨコナデ、ハケ、凝回線5条	口縁部1/12	赤色粒、黒色粒あり	91
30	Z24 土器溜り1	甕	17.2			にぶい黄橙、灰黄褐 にぶい黄橙、灰黄褐	ヨコナデ ヨコナデ	口縁部1/6		76
31	Z24 土器溜り1	壺	9.8			浅黄橙 にぶい黄橙	ヨコナデ、ケズリ ヨコナデ	口縁部1/6		90
32	Z24 土器溜り1	高杯	13.0			橙 赤彩	ヨコナデ、ハケ ミガキ	口縁部1/6		94
33	Z24 土器溜り1	高杯	23.0			橙 にぶい橙	ヨコナデ ヨコナデ、ミガキ	口縁部1/12	黒色粒あり	92
34	Z24 土器溜り1	器台			13.4	橙 橙	ハケ、ナデ ハケ、ミガキ	脚部5/12	透かし穴3ヶ所	73
35	Z24 土器溜り1	器台				明赤褐 明赤褐	ハケ ミガキ	脚部小片		74
36	Z24 土器溜り1	壺				灰白 橙、赤彩	ナデ ヨコナデ、ミガキ	頂部完形		89
37	Z24 土器溜り1	鉢	16.8	8.3	3.4	橙 橙、浅黄橙	ミガキ ヨコナデ	7/9		75
38	AB23 土器溜り2	甕	17.2			にぶい黄橙 浅黄橙、灰黄褐	ヨコナデ、ケズリ、指頭圧痕 ヨコナデ、ハケ、擬凹線7条	口縁部1/9	黒色粒あり	70
39	AB23 土器溜り2	壺	14.6			浅黄橙 橙	ヨコナデ ヨコナデ、ハケ	口縁部2/9	赤色粒、黒色粒あり 内面にモミ圧痕	65
40	AB23 土器溜り2	台付壺	9.4			橙 橙	ナデ、ミガキ ナデ、ミガキ	口縁部1/6 体部完形	海面骨針少量あり	67
41	AB23 土器溜り2	高杯			19.0	浅黄橙、にぶい黄橙 にぶい黄橙	ハケ、ナデ ナデ、ミガキ	底部7/18	赤色粒、黒色粒あり 透かし穴4ヶ所	66
42	AB23 土器溜り2	高杯				浅黄橙 浅黄橙	ナデ ナデ	底部1/12	斜格子文	111
43	AB23 土器溜り2	高杯			15.0	浅黄橙 浅黄橙	ナデ ナデ、ミガキ	底部1/6	赤色粒微量、黒色粒あり	69
44	AB23 土器溜り2	器台				浅黄橙 にぶい黄橙	ナデ ナデ、ミガキ	脚部上半完形	透かし穴1ヶ所	68
45	AC23 土器溜り3	甕	16.0			にぶい黄橙 にぶい黄橙	ヨコナデ、ケズリ ヨコナデ、ナデ、凝回線5条	口縁部1/6	赤色粒、黒色粒あり	63
46	AC23 土器溜り3	壺	15.4			にぶい橙 にぶい黄橙	ヨコナデ、ケズリ、指頭圧痕 ヨコナデ、ハケ、擬凹線11条	口縁部1/6	赤色粒、黒色粒あり	62
47	Y23S 包含層	甕	23.0			にぶい橙 にぶい橙	凝凹線5条	口縁部 1/7強	赤色酸化粒あり	56
48	Y23S 包含層	甕	(19.8)			にぶい黄橙 にぶい黄橙、にぶい黄橙	ヨコナデ、指頭圧痕、ケズリ ヨコナデ、ハケ、擬凹線7条	口縁部1/18、 頸部1/6	石英粒あり	53
49	Z23北 包含層	甕	21.2			灰黄褐 灰黄褐、黒褐	ヨコナデ、ケズリ、指頭圧痕 ヨコナデ、擬凹線8条	口縁部1/9		100
50	Y23S 包含層	甕	20.8			にぶい橙 橙	ヨコナデ、指頭圧痕 ヨコナデ、擬凹線7条	口縁部1/6	赤色酸化粒、石英粒あり	55

実測番号	グリッド	器種	口径	器高	底径	色調(内)	調整(内)	残存率	備考	番号
	遺構		(cm)	(cm)	(cm)	色調(外)	調整(外)			
51	Z23北	甕	19.4			灰黄褐	ヨコナデ,ケズリ,指頭圧痕	口縁部1/12	赤色粒、黒色粒あり	99
	包含層					にぶい黄橙	ヨコナデ、擬凹線8条			
52	Z24	甕	18.7			橙、にぶい黄橙	ヨコナデ,ケズリ,指頭圧痕	口縁部小片	赤色酸化粒あり	87
	包含層					橙、にぶい橙	ヨコナデ,ハケ,擬凹線8条			
53	Z24	甕	20.0			浅黄橙、にぶい黄橙	ヨコナデ　刺突文	口縁部1/5		79
	包含層					浅黄橙、橙	擬凹線			
54	Z23北	甕	18.0			にぶい黄橙	ヨコナデ,ケズリ,指頭圧痕	口縁部1/6	赤色粒微量あり	101
	包含層					にぶい黄橙	ヨコナデ,ナデ,擬凹線9条			
55	AA23	甕	18.0			にぶい黄橙、褐灰	ヨコナデ,ケズリ,指頭圧痕	口縁部1/9	赤色粒、黒色粒あり	59
	包含層					にぶい黄橙	ヨコナデ,ナデ,擬凹線5条			
56	Z23北	甕	18.2			にぶい黄橙	ヨコナデ,ケズリ,指頭圧痕	口縁部1/3	赤色粒、黒色粒あり	103
	包含層					浅黄橙	ヨコナデ,ナデ,擬凹線7条			
57	Z23北	甕	17.8			にぶい黄橙	ヨコナデ,ハケ,ケズリ,指頭圧痕	口縁部1/6	赤色粒微量、黒色粒あり	104
	包含層					にぶい黄橙	ヨコナデ,ナデ,擬凹線6条			
58	Y23S	甕	(17.4)			にぶい黄橙	ヨコナデ、指頭圧痕	口縁部1/9		54
	包含層					にぶい橙	ヨコナデ、擬凹線6条			
59	Z23北	甕	14.5			にぶい黄橙	ヨコナデ,ケズリ,指頭圧痕	口縁部1/9	赤色粒、黒色粒あり	97
	包含層					灰黄	ヨコナデ、擬凹線6条			
60	Z24	甕	14.1			にぶい橙	ヨコナデ、ケズリ	口縁部2/9		80
	包含層					にぶい橙	ヨコナデ、擬凹線9条			
61	Z23北	甕	15.6			にぶい黄橙	ヨコナデ,ケズリ,指頭圧痕	口縁部1/6	赤色粒あり	98
	包含層					にぶい黄橙	ヨコナデ,ナデ,擬凹線10条			
62	Y23S	甕	14.2			にぶい黄橙	ヨコナデ、指頭圧痕	口縁部1/5強	赤色酸化粒、石英粒あり	57
	包含層					にぶい黄橙	ヨコナデ、擬凹線6条			
63	Y23S	甕	12.5			にぶい橙	ヨコナデ、ケズリ	口縁部2/9	外面に煤付着	109
	包含層					にぶい橙	ヨコナデ、ハケ			
64	Z24	甕	16.0			にぶい黄橙	ヨコナデ、ケズリ	口縁部5/12		82
	包含層					にぶい黄橙	ヨコナデ、ナデ			
65	Z23北	甕	15.7			灰黄褐	ヨコナデ、ケズリ	口縁部1/4		102
	包含層					淡赤褐、褐灰、黒	ヨコナデ、ハケ			
66	Z24S	甕	16.8			にぶい黄橙	ヨコナデ	口縁部1/6		110
	包含層					にぶい黄橙	ヨコナデ			
67	Y23S	甕	13.0			にぶい黄橙	ナデ、ミガキ	口縁部2/9	石英粒あり	106
	包含層					にぶい黄橙	ナデ、ミガキ			
68	Z24	壷				にぶい橙	ヨコナデ、ナデ、指頭圧痕	体部1/2	赤色酸化粒あり外面に黒斑あり	86
	包含層					にぶい橙、橙	ナデ、ミガキ			
69	Y23S	壷				にぶい黄橙	ハケ	体部1/4	内面に板圧痕あり石英粒あり	45
	包含層					にぶい黄橙	ハケ、キザミ目			
70	Y23S	壷	13.0			橙、赤彩	ミガキ	口縁部1/12、頸部1/3強	石英粒あり	52
	包含層					橙	ヨコナデ、ミガキ			
71	Y23S	小型壷	11.0			にぶい褐	ミガキ	1/4	外面赤彩	108
	包含層					にぶい褐	ミガキ			
72	Z23北	壷	9.4			にぶい黄橙	ヨコナデ、ミガキ	5/36		105
	包含層					にぶい黄橙	ヨコナデ,ナデ,擬凹線6条			
73	Z24	底部			7.0	褐灰		底部ほぼ完形	赤色酸化粒あり	85
	包含層					浅黄橙、褐灰				
74	Y23S	底部			2.6	にぶい黄褐、灰黄褐	ナデ	底部ほぼ完形	赤色酸化粒あり内面に炭化物付着	46
	包含層					にぶい黄褐	ハケ			
75	Y23S	底部			1.8	にぶい黄褐	ナデ	底部完形	赤色酸化粒あり外面に煤付着	48
	包含層					灰黄褐	ハケ			

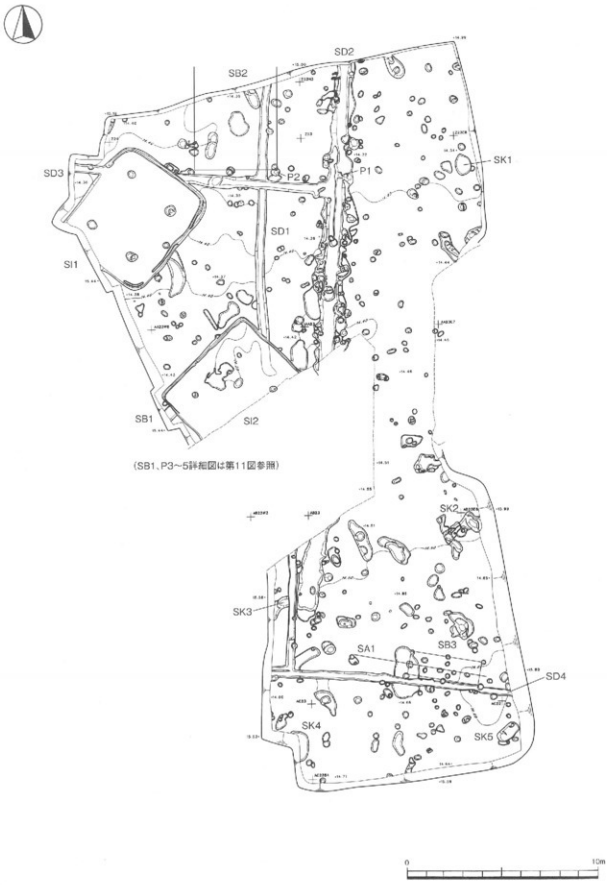
実測番号	グリッド 遺構	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調(内) 色調(外)	調整(内) 調整(外)	残存率	備考	番号
76	Y23S	底部			2.0	にぶい黄褐	ナデ	底部ほぼ完形、他は1/4強	外面に煤付着	47
	包含層					灰黄褐	ハケ			
77	Z24	底部				明褐	ハケ	小片	赤色酸化粒、石英粒あり台付	78
	包含層					橙	ミガキ			
78	Y23S	底部			13.0	にぶい黄橙、灰黄褐	ナデ、ミガキ	底部1/6	赤色酸化粒あり台付	49
	包含層					にぶい黄橙	ナデ、ミガキ			
79	AC23C	高杯	22.6			にぶい黄橙	ナデ、ミガキ	杯部1/6	赤色酸化粒、石英粒あり外面に黒斑あり	40
	包含層					にぶい黄橙	ケズリ、ミガキ			
80	Y23S	高杯				にぶい黄褐、にぶい黄橙	ナデ	脚部1/2強	透かし穴4ヶ所か2ヶ所確認	50
	包含層					にぶい橙				
81	Z24	高杯				にぶい黄橙	ナデ	脚部小片	透かし穴3ヶ所	83
	包含層					にぶい黄橙	ミガキ			
82	Z24	高杯				にぶい黄橙	ナデ	脚部小片	透かし穴4ヶ所か3ヶ所確認	84
	包含層					にぶい黄橙	ミガキ			
83	Y23S	高杯				灰黄褐	ナデ	脚部小片	赤色酸化粒あり	107
	包含層					灰黄褐	ミガキ			
84	Z24	器台			10.4	にぶい黄褐、褐灰	ミガキ	脚部1/2強	石英粒あり	77
	包含層					灰黄褐、にぶい黄橙	ミガキ			
85	Y23S	脚部			13.4	にぶい黄橙、灰黄褐	ハケ、ナデ	底部1/2	内面に煤付着	51
	包含層					にぶい黄橙、にぶい橙	ミガキ			
86	Z23北	脚部			13.2	にぶい黄橙	ナデ	底部1/4		95
	包含層					にぶい黄橙、淡赤橙	ナデ、ミガキ			
87	AB23	須恵器蓋				灰	ロクロナデ	つまみほぼ完形		71
	包含層					灰	ロクロナデ			
88	AC23b	須恵器蓋	16.2			灰	ロクロナデ	2/9	外面に自然釉付着	39
	包含層					灰	ロクロナデ			
89	Y～Z23	擂鉢				灰	ヨコナデ	口縁部小片	珠洲焼 海面骨針少量、くし目6本	64
	包含層					灰	ヨコナデ			
90	AC23a	皿	12.8	2.3	7.0	浅黄橙	ヨコナデ	ほぼ完形	非ロクロ	34
	包含層					浅黄橙	ヨコナデ			

第3表　石製品観察表

実測番号	グリッド 遺構	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	質量 (g)	石材	備考	番号
91	AB23 包含層	石鏃	18.7	8.4	3.8	630	火山礫凝灰岩		22
92	AC24 包含層	石鏃	16.2	8.9	3.1	475	角閃石安山岩		61
93	Z23 包含層	石鏃	15.5	8.1	3.7	450	粗流凝灰岩		3
94	Z24 包含層	石鏃	15.1	7.0	2.7	360	火山礫凝灰岩		5
95	AB23 包含層	石鏃	(12.9)	(10.1)	(3.6)	(590)	火山礫凝灰岩		25
96	AB23 包含層	石鏃	(14.1)	(9.5)	(2.3)	(410)	火山礫凝灰岩		21
97	Z24（SI1内） 包含層	石鏃	(11.5)	(7.8)	(2.5)	(280)	火山礫凝灰岩		4
98	AC23 包含層	石鏃	(9.7)	(7.3)	(2.1)	(140)	火山礫凝灰岩		20
99	Z24 包含層	石鏃	(6.8)	(7.7)	(2.5)	(90)	粗流凝灰岩		6
100	AB23 包含層	石鏃	(7.9)	(6.0)	(2.7)	(140)	粗流緑色凝灰岩		23
101	AB23 包含層	石鏃	(9.3)	(6.8)	(3.7)	(315)	火山礫凝灰岩		24
102	AB23 包含層	磨石	22.5	9.9	7.6	2,180	砂岩		19
103	Z23 包含層	磨石	10.5	10.2	6.0	955	粗流緑色凝灰岩		1
104	AA24 包含層	磨石	(8.2)	(6.7)	(4.9)	(419)	片麻岩		43
105	AA23 包含層	敲石	14.5	13.0	7.4	1,985	火山礫凝灰岩		58
106	Y24 包含層	石核	4.3	3.7	2.9	50	鉄石英		111
107	AB23 包含層	軽石	6.3	3.2	4.1	14			72
108	Z24N.W 包含層	仕上げ砥石	7.8	3.9	7.0	20	泥岩	鳴滝産	88

第4表　鉄製品観察表

実測番号	グリッド / 遺構	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	質量 (g)	備考	番号
109	Z23 / SD 2	棒状製品	7.2	10.0	8.0	5.4	先端部屈曲	113
110	Z23 / SD 2	釘	16.5	5.0	4.0	0.7		114B
111	Z23 / SD 2	釘	20.0	7.0	6.0	0.7		114A
112	Z24 / P 2	小刀	18.9	2.5	4.2	49.9	SB 2 柱穴	112
113	AA24 / SD 1	不明	3.9	1.4	9.0	5.0		116
114	AA24 / 包含層	板状製品	3.6	2.5	1.3	5.7		115



第25図　遺構全体図(S=1/200)

第26図　周辺遺構全体図(S=1/200)

調査区遠景（北東から）

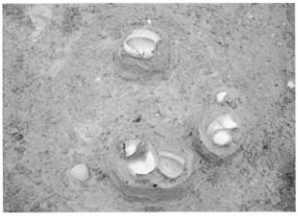
全景（北から）

SI 1（北東から）

SI 2 改修後完掘（東から）

土器5・6出土状況（SI 1 内）

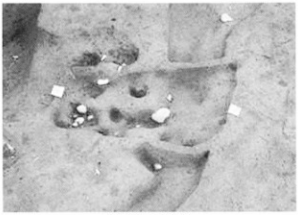
SB 2（西から）



土器9～11出土状況（SI 1 内）

SB 3（西から）

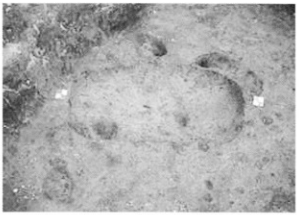
SB 1（東から）



SK 3（南から）

SI 2、SB 1 完掘（東から）

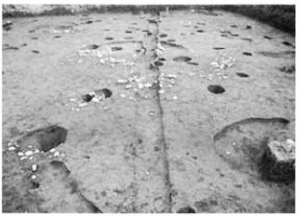
SK 4（東から）



SK 5（北西から）

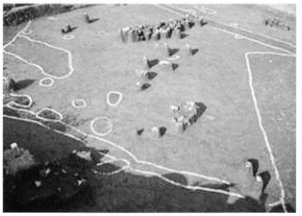
SD 3 （東から）

SD 1（北から）



SD 4（南西から）

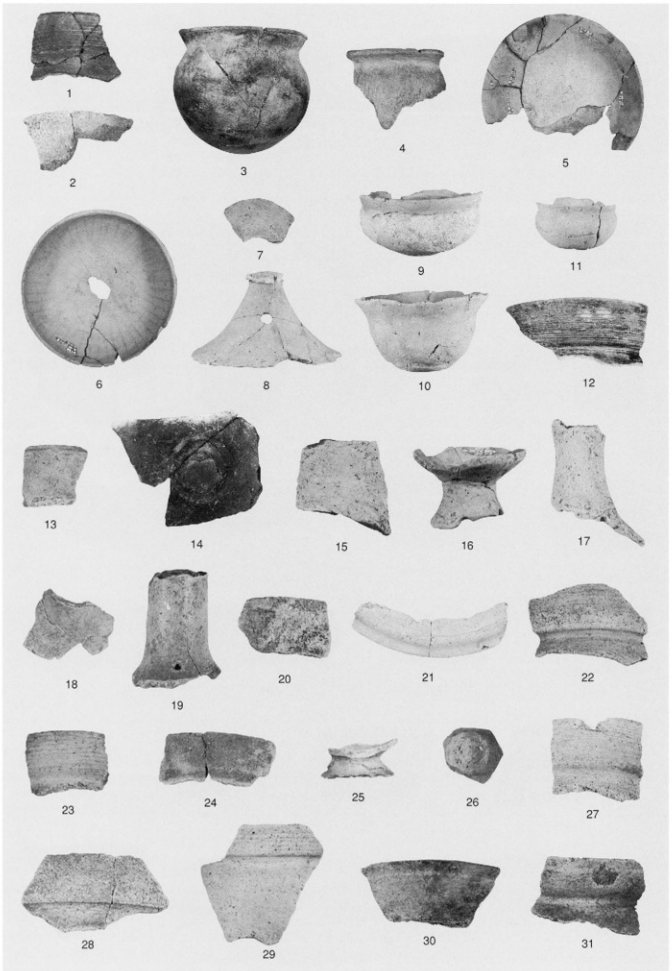
SD 2（北から）

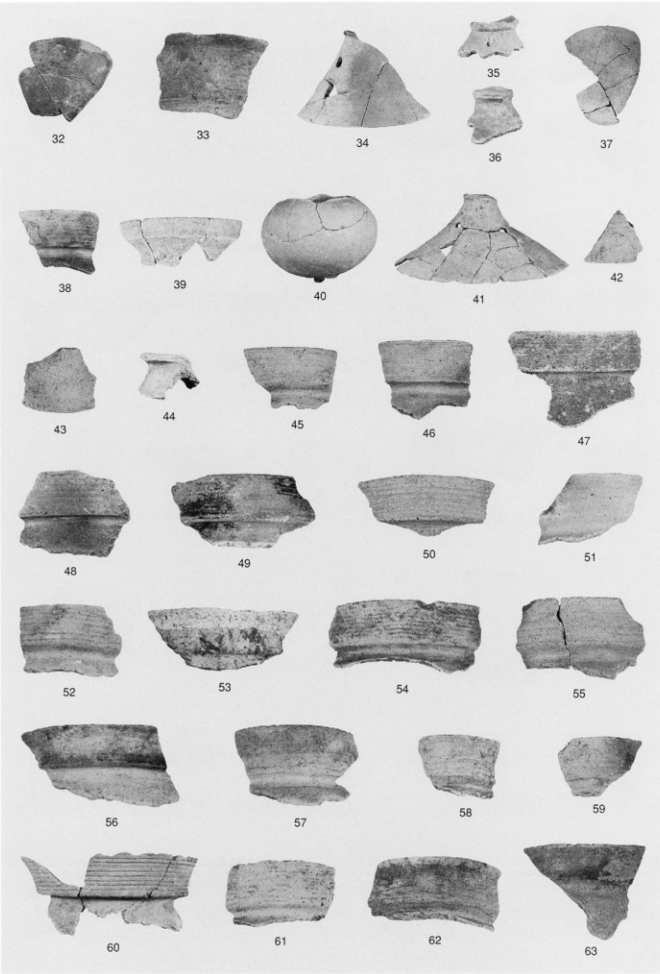


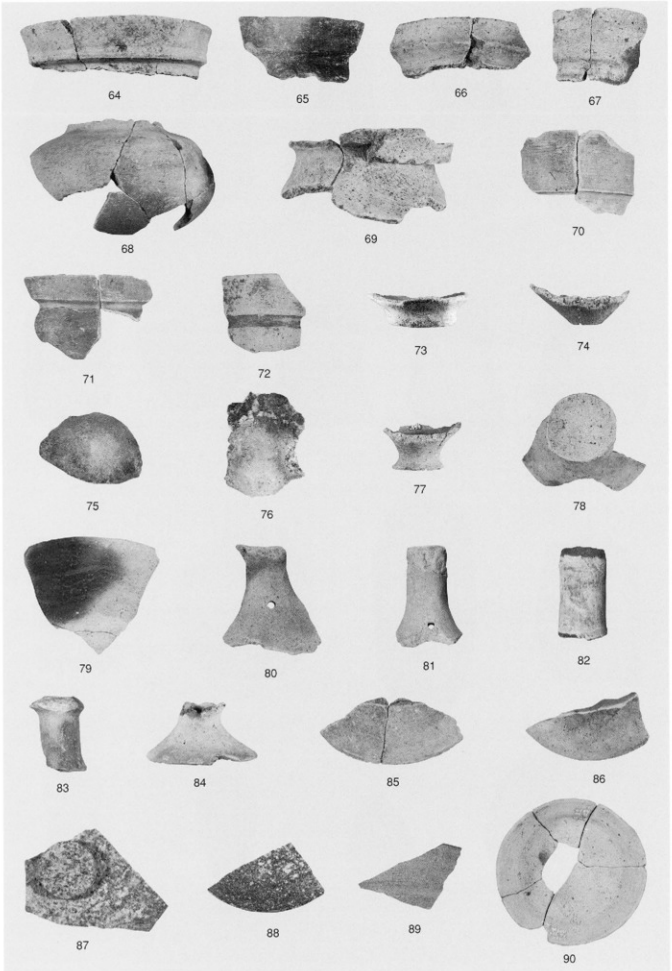
土器溜り 1（南西から）

SD 1 ・ 2（南から）

土器溜り 2（東から）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31


32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63


64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90

91

92

93

94

95

96

97

98

99

100

101

102

103

104

105

106

107

108

報告書抄録

ふりがな	ふつかいちいしばちいせき
書名	二日市イシバチ遺跡2
副書名	
シリーズ名	北西部土地区画整理地区内二級河川安原川広域河川事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	
編著者名	田村昌宏
編集機関	野々市市教育委員会
所在地	〒921－8510　石川県野々市市三納一丁目1番地　TEL076－227－6122
発行年月日	西暦　2012年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
二日市 イシバチ遺跡	石川県 野々市市 二日市町	17344	16024	36° 32′ 18″	136° 35′ 38″	20100803 ～ 20101025	510	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
二日市 イシバチ遺跡	集落	弥生時代 古墳時代 古代 中世	竪穴建物、布掘建物 掘立柱建物、柵列 土坑、溝、	弥生土器、土師器、須恵器、 中世土師器、中世陶磁器 石製品、鉄製品	

要約

弥生時代後期～古墳時代前期の集落跡を確認した。主要な遺構は竪穴建物2棟、布掘建物1棟で、布掘建物は桁行6.5m×梁行4.5mと大型である。布掘建物廃絶後、同地で竪穴建物を構築する。その際、布掘建物の柱間のサイズに合わせて築造している。遺物は甕・壷・高杯を主体とした土器と、石鏃を中心とした石製品が出土した。また、竪穴建物内からは小型鉢3個体が一括で出土していることから、土器祭祀が行われたとみられる。

古代は、須恵器が出土したのみである。

中世は、掘立柱建物2棟と柵列1条、溝4条を検出した。掘立柱建物は認められるが遺物の出土量が極めて少なく、南西方に当該時期の集落跡が存在することから、本調査区は集落の縁辺部と想定する。溝は東西・南北方向に走り、造り変えがなされていたようである。溝は排水及び宅地間や集落と耕作地との境界を示すものと思われる。

2012年３月30日　発行

北西部土地区画整理地区内二級河川安原川広域河川改修事業
埋蔵文化財発掘調査報告書

二日市イシバチ遺跡２

著作権所有　石川県野々市市三納一丁目１番地
発　行　者　野々市市教育委員会
印　刷　者　石川県野々市市矢作三丁目18
　　高桑美術印刷株式会社